

無しな、傲慢な、怪しからん男だ！」

そして彼は、眼に湧いて来た一滴の涙を娘に見せないやうに、顔を外向けた。

それから三日たつて、四時間も黙り込んでゐた後、ぶしつけに娘に云つた。

「私は、もう決してあいつのことを云はないやうにジルノルマン嬢にお願ひをするんだ。」

ジルノルマン嬢は、もう何としても駄目だと諦め、次のやうな深い診断を下した。「お父さんは、妹をもあの間違ひがあつてからは餘りよく思つて被居らなかつた。マリユスも嫌つて被居るのに違ひない。」

「あの間違ひがあつてからは」といふのは、妹が大佐と結婚してからは、といふ意味であつた。

それからまた、讀者の既に察し得た如く、ジルノルマン嬢は、自分の好きな鎗騎兵の將校をマリユスの代りに据ゑやうといふ試みに失敗してゐた。後任のテオデュールはうまくゆかなかつた。ジルノルマン氏は、これがいけなければあれを取らうといふ人ではなかつた。心の空虚には、間に合せの穴塞ぎでは駄目である、またテオデュールの方でも、遺産を喫ぎつけてはゐたが、機嫌を取るのには嫌であつた。老人は將校を體屈させ、將校は老人に不快を與へてゐた。中尉テオデュールはたしかに快活ではあつたが、然し饒舌だつた。華美ではあつ

たが、然し凡俗だつた。愉快な男ではあつたが、然し悪い交友を持つてゐた。實際情婦も持つて居り、實際それを吹聴しもしたが、然しその話し方が下等だつた。彼のあらゆる長所も、それ／＼欠點を持つてゐた。ジルノルマン氏は、彼がバビローヌ街の兵營の附近でやつてゐる艶事の話聞き飽きてしまつた。その上ジルノルマン中尉は、時々三色の帽章をつけ軍服を着てやつて来た。ジルノルマン老人にはそれがまた堪らなく嫌であつた。彼は遂に娘に云つた。「もうあのテオデュールは澤山だ。よかつたらお前だけ逢ふがいゝ。わしは泰平の日に軍人を見るのは餘り好まない。サーベルを引きずつて歩く奴よりサーベルを振り廻す奴の方が、まだしもいゝかもしれん。戦争で刃を合せる方が往來の鋪石に劍の鞘をがちや／＼やるより、とにかくまだ優つてる。それに、空威張りをして反りくり返り、女の兒のやうに腹帯をしめ、胸當の下にコルセットを着るなんぞは、馬鹿々々しさの上塗りだ。本當の男子は、虚勢を張つたり氣取つたりするものではない。いやに強がつたりでれ／＼したりしはしない。テオデュールはお前の所だけに引止めておくがいゝ。」

そして娘が、「でもあなたの甥の子ではありませんか」と云つた所で無駄なことだつた。ジルノルマン氏は、爪の先まで祖父ではあつたが、一點も大伯父たる所はなかつたのである。事實彼は慧眼を具へて二人を比較してゐたので、テオデュールが居ることは益々マリユス

を惜しむの念を強めるのみであつた。

或る晩、六月の四日であつたが、ジルノルマン老人はなほ煖爐に盛んな火を焚かして、娘を隣室に退かせ縫物をさしてゐた。そして彼は一人で牧歌的な飾り立てをした室に残つてゐて、薪臺の上に足を置き、丸折りの広いコロマンデルの屏風に半ば圍まれ、緑色の笠の下には二本の蠟燭が燃えてる卓子に眩をつき、毛氈の眩掛椅子に身を埋め、手に一冊の書物を持つてゐた。然し別にそれを讀んでるでもなかつた。いつもの通りアंकローアイヤブル（執政内閣時代の輕薄才子）式の服装をして、丁度カラー（譯者曰、大革命から帝政時代の政治家）の古い肖像を見るがやうであつた。そんな服装で往來に出やうものなら人だかりがするかも知れなかつたが、娘はいつも彼が出かける時には僧正のやうな廣い綿入の絹外套を着せてやつたので、そのために人の眼につかなかつたのである。家に居る時には、起き上つた時と寝る時との外は決して部屋着をつけなかつた。「それを着ると、老人らしく見える、」と彼は云つてゐた。

ジルノルマン老人は、マリユスのことを考へると、可愛くなつたり苦々しくなつたりしたが、普通は苦々しさの方が強かつた。その苛ら立つた愛情は、しまひには煮えくり返つて、憤怒に終るのが常であつた。そして後には、諦めをつけて心を痛めるものもちつと受け容

れやうとするほどになつてゐた。彼は自ら説ききかせてゐた、もうマリユスが歸つて来る筈はない、歸つて来るものならとくに歸つて来る筈である、もう諦めなければならぬと。そして彼は、もう萬事終りだ、自分は「あの男」に再び逢はないで死んでゆくのだ、といふ考へに馴れようとしてゐた。然し彼の天性はそれに反抗した。年老いた近親の心はそれに同意することが出来なかつた。然し彼は口癖になつて悲しい言葉をくり返した、「なに、歸つて來はすまい！」彼はその禿げた頭を胸に垂れ、痛ましい激昂した眼付を、爐の灰の上にぼんやり定めてゐた。

さういふ夢想の最中に、老僕のパスクがはいつて來て、そして尋ねた。

「旦那様、マリユス様をお通し申し宜しうございませうか。」

老人は眞蒼になつて身を起した。電流のために起された死骸のやうであつた。全身の血は心臓に流れ込んでしまつた。彼は口籠つた。

「どこのマリユス様だ？」

「存じません。」とパスクは主人の様子に驚き恐れて答へた。「ニコレットが私の所へ來て申したので、若い方がみえてゐる、マリユス様と申し上げてくれと。」

ジルノルマン老人は低い聲で呟いた。

「お通し申せ。」

そして彼は同じ態度のまゝで、頭を振り動かしながら扉を見つめてゐた。扉は開いた。一人の青年がはいつて来た。マリユスであつた。

マリユスは、はいれと云はれるのを待つかのやうに、扉の所に立ち止つた。

彼の見すばらしい服装は、蠟燭の笠が投げてる影の中でよく見えなかつた。たゞその落ち着いた真面目な而も妙に悲しげな顔だけがはつきり見えてゐた。

ジルノルマン老人は、驚きと喜びとでぼんやりして、宛も幽霊の前に出たやうに、たゞぼ一つとした光りを見るきりで、暫く身動きもし得なかつた。彼は氣を失はんばかりであつた。彼は眩惑しながらマリユスを見た。確かに彼だつた、確かにマリユスだつた。

遂に來た、四年の後に！ 彼は、云はゞ一目でマリユスの全部を見て取つた。マリユスは美しく、け高く、立派で、大きくなり、一人前の男になり、申し分のない態度になり、見事な様子になつてゐた。彼は兩腕を擴げ、その名を呼び、飛びつきたいほどであつた。彼の心は喜びに解け、愛の籠つた言葉は胸一杯になつて溢れやうとした。そして遂にその愛情は湧き上つて、唇まで上つて來た。然し常に反對の道をゆく彼の底の性質のために、唇からは荒しい言葉が出た。彼はだしぬけに云つた。

「何しに此處へやつて來た？」

マリユスは當惑して答へた。

「あの……。」

ジルノルマン氏は、自分の腕にマリユスが身を投じてくるのを欲したであらう。彼はマリユスにもまた自分自身にも不満だつた。自分は粗暴でありマリユスは冷淡であることを、彼は感じた。内心は如何にもやさしく悲しいのに外の態度は冷酷でしかあり得ないことを感ずるのは、老人にとつて耐へ難い苛ら立ちの種であつた、苦々しい氣持ちが彼に戻つて來た。彼は氣むづかしい調子でマリユスの言葉を遮つた。

「では何のために來たんだ？」

その「では」といふ言葉は、わしを抱擁しに來たんでないなら、といふ意味だつた。マリユスは、蒼ざめて大理石のやうな顔をしてる祖父を眺めた。

「あの……。」

老人は酷しい聲で云つた。

「私の許しを願ひに來たのか。自分の悪かつたことが分つたのか。」

彼は、マリユスを正道に引戻してやつたのだと思つてゐた、「子供」は意を屈しやうとして

るのだと思つてゐた。マリユスは身を震はした。祖父が求めてゐるのは父を捨てることであつた。彼は眼を伏せて答へた。

「いゝえ。」

「それでは何の用だ？」と老人は憤怒に満ちた悲痛の情を以て急き込んで叫んだ。

マリユスは両手を握り合せ、一步進み出て、弱い震へ聲で云つた。

「あの、どうかお慈悲を。」

この言葉はジルノルマン氏が心を刺戟した。も少し早く云はれたら、彼は心を和げたであらう。然しもう遅かつた。祖父は立ち上つた。彼は両手で杖にすがり、唇は眞白になり、額には筋立つてゐたが、その高い身體は首垂れてゐるマリユスの上に聳えた。

「お前に慈悲をかける！ 九十一歳の老人に向つて若い者が慈悲を求めるといふのか！ お前は世間にはいつて居り、わしは世間から出てゐる。お前は、芝居や舞踏會や珈琲店や球場に出入し、氣が利いて居り、女の氣に入り、男振りがいゝ。わしは、夏の最中でも火にかぢりついてゐる。お前は、富の中の富である若さを持つてゐる。わしは、老人の貧しさを、衰弱と孤獨とを持つてゐる。お前は、三十二枚の齒と、いゝ胃袋と、はつきりした眼と、力と、食慾と、健康と、元氣と、森のやうな黒い髪とを持つてゐる。わしは、もう白髪も持たず、齒

も足の力も記憶さへも失つてゐる、シャルロ街とシューム街とサンクロード街の三つの名前さへ絶えず間違へてゐる、それほどになつてゐるのだ。お前は、光り輝く未來を前途に持つてゐる。

わしは、もう光は少しも見えなくなりかけてゐる、それほど闇夜の中にふみこんでゐるのだ。お前は、女の後を追つかけてゐる、そんなことは云はなくても分る。わしは、世の中の誰からも顧みられない。それだのにお前はわしに慈悲を願ふのか。馬鹿な！ モリエールだつてこんなことは思ひついてやしない。そんなことを云つて裁判所を笑はせやうといふんなら、辯護士諸君、私は心から祝するよ。可笑しな奴等だ。」

そしてこの老人は、怒つた嚴めしい聲で云ひ續けた。

「一體、わしにどうしろと云ふのだ？」

「私があなたの前に出ますのは、御心に逆ふことゝは存じて居ります。」とマリユスは云つた。「然し私はたゞ一つお願ひしたいことがあつて参りました。それがすめばすぐに出て行きます。」

「お前は馬鹿だ！」と老人は云つた。「誰が出て行けと云つた？」

この一言は、「まあ、わしの許しを乞へ、わしの首に飛びついて来い！」といふ心の底のやさしい言葉を云ひ換へたものであつた。ジルノルマン氏は、マリユスが間もなく自分の許を去

つてゆくに違ひないと感じた。喜んで迎へなかつたために彼を反抗さし、酷しい態度をしたため彼を逐ひ返すことになつたと感じた。老人は自らはつきりさう思つた。そのためにの彼悲しみは益々大きくなつた。そしてその悲しみがすぐに憤怒に變つたので、彼の嚴酷さはまた増してきた。彼はマリユスにその心持ちを了解して貰ひたかつたであらう。然しマリユスは了解しなかつた。そしてこのことは老人を激昂させた。彼はまた云つた。

「こら、お前はこのわしを、お前の祖父を捨て、行つた。お前は家を出て何處かへ行つてしまつた。お前は伯母を心配させた。そして何をしたんだ。云はずと分つてる。その方がいゝからさ。放埒な生活をし、遊び歩き、勝手な時間に歸つて來、面白いことをし、働いた様子も見せず、拂つてくれとも云はないで借金をし、よその家の窓硝子を壊し亂暴な眞似をし、そして四年ぶりにわしの所へ戻つて來たんだ。わしに云ひたいのはそれだけのことだらう！」

孫の愛情を得るためのこの荒々しいやり方は、却つてたゞマリユスを黙らせるだけだつた。ジルノルマン氏は、彼獨特の妙に傲然たる腕組みをして、苦々しくマリユスに云ひかけた。

「こんな話は止めだ。お前は何かわしに願ひに來たと云つたが、一體何だ、何のことだ？ 云

つてみるがいゝ。」

「あの、」とマリユスは、深淵の中に落ち込まうとしてる者のやうな眼附をして云つた。「私はあなたに、結婚の許しをお願ひに参りました。」

ジルノルマン氏は呼鈴を鳴らした。バスクが扉を少し開いた。

「わしの娘を呼んでこい。」

それからすぐに扉が再び開いて、ジルノルマン嬢が、はいつては來ないで身體だけを見せた。マリユスは、黙つたまゝ腕を垂れ、罪人のやうな顔をして立つてゐた。ジルノルマン氏は、室の中をあらゆる歩き廻つてゐた。彼は娘の方に向いて、云つた。

「何でもない。これはマリユスさんだ。御挨拶をするがいゝ。この人は結婚をしたいんださうだ。それだけだ。もう行つていゝ。」

老人の切れくゝな噎れた聲の調子は、ひどく激昂しきつてゐることを示してゐた。伯母は喫驚した様子でマリユスを眺め、その姿もよくは分らないといつた風で、何等の身振りも言葉も示さず、暴風の前の枯葉よりも早く父の一息のために吹きやられてしまつた。

そのうちにジルノルマン老人は、煖爐に背中を寄せかけた。

「お前が結婚する！ 二十一歳で！ 自分できめて、たゞ許しだけを願ふ、それも形式だけ

に！ まあ坐るがよい。所で、お前に逢はないうちに革命が起つた。ジャコバン黨が勝つた。お前は満足に違ひない。お前は男爵になつてからまた共和派になつてるだらう。二つを調和さして。共和は男爵の位に味を添へるからね。お前は七月革命で勳章でも貰つたか。ルーヴル宮殿にも少しは手を出したか。すぐこの近く、ノルマンディエール街と向き合つたサンタントアール街に、或る家の四階の壁に弾丸が一つ打ち込んである。そして千八百三十年七月二十八日といふしるしがついてる。行つて見るがよい。ためになるだらう。お前達の仲間はなるほど結構なことをするよ。それから、ベリー公の記念碑の所に噴水を拵へてるといふぢやないか。そんなことをして、それでお前は結婚したいといふのか。誰とだ。さういふことはやたらに申出せるものではない。」

彼は言葉を切つた。そしてマリユスが答へる隙もなく、また激しく云ひ出した。

「どうだ、お前には身分が出来たらう。財産が出来たらう。辯護士の職をしてどれ位とれるのか。」

「一文もとれません。」とマリユスは荒い決心と確乎さとを以て云つた。

「一文もとれない？ ではわしがやる千二百法だけで暮してゆかなけりやならないんだな。」マリユスは答へなかつた。ジルノルマン氏は續けて云つた。

「では、思ふに、女が金持ちだな。」

「私と同じやうなものです。」

「なに！ 持参金もないのか。」

「ありません。」

「遺産の當でもあるのか。」

「ありさうありません。」

「身體だけ！ そして父親は何だ。」

「存じません。」

「そして娘の名は何といふんだ。」

「フォーシュルヴァン嬢といひます。」

「フォーシュ……何だ。」

「フォーシュルヴァンです。」

「ちッ！」と老人は云つた。

「どうぞ！」とマリユスは叫んだ。

ジルノルマン氏は獨語でもするやうな調子で彼の言葉を遮つた。

「なるほど、二十一歳、身分はなし、年に千二百法、ボンメルシー男爵夫人が八百屋に二錢の三葉みつばを買ひに行かうつてわけだな。」

「どうぞー」とマリユスは最後の望みもなくなつたのに茫然として云つた、「お願いです。私は天に誓つて、手を合して、あなたの足下に身を投げて、お願いします。私にその婦人と結婚することを許して下さいー」

老人は鋭い痛ましい笑ひと共に咳き込み、そして云つた。

「はつ、はつ、はつ、お前はこんなことを考へたんだらう。なあに、あの舊弊な老耄おきなを、あの譯の分らぬ馬鹿爺を、一つ見に行つてやれ。二十五歳になつてゐないのが残念だ。二十五歳にさへなつてりやあ、結婚承諾要求書をさしつけてやるんだがな、あんな奴あつてもなくともいゝんだがな。でもまあいゝや、かう云つてやれ。お爺さん、私に逢つて嬉しいだらう、私は結婚したいんだよ、何とかいふ嬢さんと結婚したいんだ、どこかの男の娘さんだ、私は靴もないし、女には褌衣もない、丁度似合つてる、私は仕事も未來も若さも生命も水にでもぶつ込んでしまひたい、私は女の首つ玉にかちりついて貧乏の中に飛び込んでしまひたい、それが私の理想だ、お前はいつでも同意しなけりやいけなさいよ。さう云つたらあの干乾びた老耄も同意するだらう。そしてかう云ふだらう。なるほど、好きなやうにするがいゝ、

その石ころを背負ひ込むがいゝ、お前のブールヴァンとかクールヴァンとかと結婚するがいゝ。——所がいけない。断じて出来んー」

「お父さんー」

「いかんー」

この「いかん」といふ語が發せられた調子に、マリユスは凡ての希望を失つた。彼は頭を垂れ、よろめきながら、徐々に室の中を退いていつた。それは立ち去る人といふよりも、寧ろ死にかゝつてる人のやうであつた。ジルノルマン氏は彼を目送してゐたが、扉が開かれてマリユスが外に出やうとした時、性急ながむしやらな老人の敏活さで數歩進んで、マリユスの頸筋を掴み、激しく室の中に引戻し、肱掛椅子の上に投げ倒し、そして云つた。

「まあよく話せー」

かく彼の態度が變つたのは、マリユスが偶然發した「お父さん」といふ一語のためだつた。マリユスは茫然として彼を眺めた。ジルノルマン氏の變り易い顔にはもう、露骨な名狀し難い人の好さしか現はれてゐなかつた。後見人は祖父と代つたのであつた。

「さあ話すがいゝ。お前の艶種を、女のことをすつかり私に云つてしまひなさい。どうも、若い者ときたら仕方がない。」

「お父さん」とマリユスは云つた。

老人の顔には、何とも云へない輝きが満ちた。

「うむ、さうだ、わしをお父さんと呼ぶがいゝ、聞いてやるから。」

その時にはもうその粗暴さのうちにも、或る親切なやさしい打ち明けた親身らしい調子が備つてゐて、マリユスは突然落膽から希望に移つてゆき、そのためにぼんやりして酔つたやうになつた。彼は卓子の側に坐つてゐたので、服装の見すばらしさが蠟燭の光りに目立ち、ジルノルマン老人はそれを見て驚いた。

「で、お父さん」とマリユスは云つた。

「いかにも」とジルノルマン氏は遮つた、「お前は全く一銭もないんだね。お前の様子は盗人のやうだ。」

彼は引出しの中を探り、金入れを取り出し、それを卓子の上に置いた。

「さあ、こゝに二百法ある。帽子でも買ふがいゝ。」

「お父さん」とマリユスは云ひ出した、「親切なお父さん、どんなにか私は彼女を愛してゐることです。御想像もつきません。初めて逢ひましたのはリュクサンブールグの園でした。彼女はいつも其處にやつて來ました。初め私は大して氣にも止めませんでした。けれど

それから、どうしたのか自分でも分りません、いつしか戀するやうになりました。あゝそのために私はどんなにか心を痛めましたでせう。そして今では、毎日、彼女の家で、逢つてゐます。父親はそれを知りません。所が、察しても下さい、その親子は速くに行かうとしてゐます。私達は晩に庭で逢つてゐます。父親につれられてイギリスに行くといふのです。それで私は、お祖父様に逢つて話してみやうと考へました。別れるやうなことがあれば、私は屹度氣が變になります、死にます、病氣になります、水に身を投げます。どうしても結婚しなければなりません。狂人になりさうですから。事實はそれだけです。云ひ落したことはないつもりです。彼女は、ブリューメ街の鐵門のある庭に住んでゐます。アンヴァリードの方です。」

ジルノルマン老人は、顔を輝かしてマリユスの側に坐つてゐた。彼に耳を傾けその聲音を味ひながら、また同時にゆる／＼と嗅煙草を味つてゐた。所がブリューメ街といふ一語をきいて、彼は煙草を嗅ぐのを止め、煙草の残りを膝の上に落した。

「ブリューメ街！ ブリューメ街だな。……までよ！……その近くに兵營はないかね。……

さうだ、それだ。お前の従兄のテオデールがそのことを云つてゐた。あの鎗騎兵の將校だ。……いゝ娘、さう、いゝ娘ださうだ。……うむ、ブリューメ街。昔はブローメ街と云つた所



だ。……漸く思ひ出した。ブリーメ街の鐵門の娘のことなら、わしも聞いたことがある。庭の中。パメラ(譯者曰、リチャードソンの小説中の女主人公)のやうな美人、お前の眼識は悪くない。綺麗だといふ評判だ。こゝだけの話だが、あの鎗騎兵の馬鹿めも少しからかつてらしい。どれ位進んだ話かわしは知らん。だがそんなことはどうでもいゝ。その上あいつの云ふことは當にならん。法螺をふくからな。マリユス、お前のやうな若い者が女を想ふのは當り前だ。お前の年齢だからな。ジャコバン黨より色男の方がわしは好きだ。ロベスピエールに捕つてゐるより、娘つ兒に捕つてゐる方がいゝ、何人ゐてもかまはん。わしにした所で、確かに、革命家共のうちでも女だけは愛したものだ。美人はいつでも美人だからな。それに異論はある筈がない。所でその娘は、父親に隠れてお前に逢つてゐるんだな。よくあることだ。わしにもそんな話はある、いくらもある。そしてお前は方法を心得てるか。本氣にならないことだ、深みにはまらないことだ、結婚だの正式の手続きだのに落ちてゆかないことだ。ただうまくさへやればいゝ。ふみ外しさへしなけれりやいゝ。滑りぬけるんだ、結婚してはいかん。古い引出しの中にいつでも金包みを入れてる、元から人の好いお祖父さんに逢ひに行くんだ。そして云ふがいゝ。お祖父さんこの通りです。するとお祖父さんは云つてくれる。なに當り前のことだ。青春は過ぎ去るものだ、老年は碎け去るものだ。私も一度は若かつ

た、お前も今に年取る。やがてお前にも孫にさう云つてやるやうな時が来る。さあこゝに二百ピストル(二千法)ばかりある。これで遊んで来るがいゝ。それが一番だ。萬事かういふ風になるのが本當だ。結婚するものではない。それかと云つて女に手を出すなといふんではない。——どうだ分つたか。」

マリユスは石のやうになつて一言も發することが出來ず、たゞ頭を振つて分らないといふ意を示した。

老人は笑ひ出し、年老いた眼を瞬き、彼の膝を叩き、不思議な輝いた顔付で彼をまともに見つめ、ごくやさしく肩をすぼめて云つた。

「馬鹿だね、情婦にするんだ。」

マリユスは顔色を變へた。彼は今祖父が云つたことは少しも理解してゐなかつた。ブローメ街だの、パメラだの、兵營だの、鎗騎兵だのといふ冗辯は、マリユスの前を幻燈のやうに通り返した。それらのうちには、百合の花のやうなコゼットに交渉のあるものは一つもなかつた。老人は種々なことを饒舌りちらした。然しそれらの枝葉の言葉は、マリユスが了解した一言に、コゼットに對する極度の侮辱である一言に、遂に到達した。「情婦にするんだ」といふその一言は、謹嚴な青年の心を刃の如く貫いた。

彼は立ち上り、下に落ちてゐた帽子を拾ひ、そして泰然たるしつかりした歩調で扉の所まで行つた。其處で彼はふり向き、祖父の前に恭しく身を屈め、再び頭をもたげ、そして云つた。

「五年前にあなたは私の父を侮辱しました。今日はまた私の妻を侮辱しました。もう何もお願ひしません。お別れします。」

ジルノルマン老人は、呆れ返り、口を開き、腕を差出し、立ち上らうとした。然し彼に一言を發する隙も與へないで、扉は再び閉され、マリユスの姿は消えた。

老人は暫く身動きもせず、雷に打たれたやうになり、口を利くことも息をすることも出来ず、宛も握り拳で喉をしめつけられてるがやうであつた。やがて彼は肱掛椅子から身をふりもぎ、九十一歳の老年に能ふ限りの早さで扉の所に駆け寄り、扉を開き、そして叫んだ。

「誰か、誰か居ないか！」

娘がやつて來、次に召使共がやつて來た。彼は哀れな嘆れ聲で云つた。

「あいつを追つかけてくれ。捕へてくれ。私はあいつに何を云つたんだらう。あれは狂人だ。逃げていつた。あゝ、神よ、あゝ、神よ！ 此度はもう歸つて來はすまい！」

彼は往來が見える窓の所へ行き、うち震へる老いた手でそれを開き、身體を半分以上も外

に乗り出し、後ろからバスタとニコレットとに引止められながら、叫んだ。

「マリユスー マリユスー マリユスー マリユスー」

然しマリユスにはもうその聲が聞えなかつた。その時彼は、既にサン・ルイ街の角を曲つてゐた。

八十歳の坂をとくに越したこの老人は、心痛の表情をして二三度兩手を颯額の所に持つてゆき、よろめきながら後に退り、肱掛椅子の上に身を落し、脈も止まり、聲も出ず、涙も湧かず、茫然自失した様子で頭を振り肩を震はし、眼に見え心にあるものは、たゞ闇夜に似た何か沈鬱な底深いものゝみであつた。

## 第九編 彼等は何處へ行く

## 一 ジャン・ヴァルジャン

右と同じ日の午後四時頃、ジャン・ヴァルジャンは、シャン・ドゥ・マルス（練兵場）の最も寂しい土堤の影に一人で座つてゐた。用心のためか、或は瞑想に耽りたいと思つてか、或は單にどんな生活にも次第に起つてくる知らず識らずの習慣の變化からか、彼はこの頃餘りコゼットを連れて外出しなかつた。彼は労働者の上衣を着、鼠色の麻のズボンをはき、長い庇の帽子で顔を隠してゐた。現在ではもう彼はコゼットの側で落ちついて幸福であつた。一時彼を脅かし煩はしたのも消え失せてしまつてゐた。然しこの一二週間以來、別種の心配がやつて來た。或る日大通りを歩いてゐると、テナルディエの姿を見かけた。變装のためにテナルディエは彼を見て取り得なかつた。然し其後ジャン・ヴァルジャンは、幾度もテナルディエに逢ひ、今ではテナルディエがその附近をうろつていることも確かになつた。そしてこのことは遂に彼に大なる決心を促さした。テナルディエが居ることは、また同時にあらゆる危険が存在することだつた。

その上パリーは平穩ではなかつた。政治上の騒ぎのために、何か身の上に隠すべき點を持つた者にとつては、ごく都合の悪い状態になつてゐた。警察の方ではごく不安に疑ひ深くなり、ベパンやモレーの如き過激な人物を狩り出しながら、またジャン・ヴァルジャンの如き者をも容易に發見し得るに違ひなかつた。

それらのことを考へて、彼は心配になつてきた。

それからまた最後に、不可解な一事が起つて來、今なほあり／＼と頭に殘つてゐて、彼の警戒の念を一層強めたのであつた。その日の朝、たゞ一人先に起き上り、コゼットの室の戸が開かないうちに庭を歩いてゐると、壁の上に恐らく釘で彫りつけられたらしい一行の文字が突然眼にはいつた。

ヴァ、エ、ル、リ、ー、街、十、六。

それはごく新らしく誌されたもので、その線は眞黒な古い漆喰の中に白く見えて居り、壁の根本にある一叢の蕁麻は新らしい漆喰の粉を被つてゐた。恐らく前夜のうちに書かれたものに違ひなかつた。一體これは何だらう？ 誰かの住所か、それとも他の者に對する相圖か、それとも自分に對する警告か？ 何れにしても知らない者等が庭に侵入して來たことは明かだつた。以前に家中を驚かした不思議な出來事を彼は思ひ起した。そしてあれかこれかとし

きりに頭を悩ました。釘の先で壁に書かれた一行の文字については、恐がらしてはならないと思つてコゼットには少しも話さなかつた。

種々のことを考へ推測してジャン・ヴァルジャンは、愈々パリを去り、フランスをも去り、イギリスに渡らうと決心してゐたのであつた。コゼットにも前以て知らして置いた。一週間のうちに立出しやうと思つてゐたのである。で今彼はシャン・ドゥ・マルスの土堤の蔭に坐つて種々の考へを頭の中に浮べてゐた、テナルディエのこと、警察のこと、壁の上に書かれた不思議な一行の文字のこと、旅行のこと、旅行券を得るのに困難なこと。

さういふことで頭を満してゐる最中に、彼は、自分のすぐ後ろの土堤の頂に誰かゞやつて来て立ち止つたのを、日の光りが投じたその影で見取つた。彼がふり向かうとした時、四つに折つた一枚の紙が頭の上から落されたかのやうに膝の上に落ちてきた。彼はその紙片を取り、それを披くと、其處には鉛筆で大きく一語認めてあつた。

「引越せ。」

ジャン・ヴァルジャンは急いで立ち上つたが、土堤の上にはもう誰も居なかつた。あたりを見廻すと、鼠色のだぶ／＼した上衣を着、塵に汚れた綿天鰐絨のスボンをつけた、子供よりは大きく、大人よりは小さい一人の者が、柵を躍り越え、シャン・ドゥ・マルスの溝の中に滑り込んでゆくのを見た。

ジャン・ヴァルジャンは、深く考へ込んですぐに家へ歸つた。

## ニマリユス

マリユスは凡ての望みを失つてジルノルマン氏の家から出て來た。はいつてゆく時には僅か一縷の希望を持つてゐたが、出て來る時には深い絶望を懷いてゐた。

而も、若い人の心を觀察したことがある者は了解するであらうが、かの鎗騎兵は、將校は、馬鹿者は、従兄のテオデールは、彼の精神に何等の陰影をも残さなかつた。少しの陰影をも残さなかつた。孫に向つて祖父がだしぬけに洩らしたその秘密から、戯曲家なら明かに何かの紛亂を期待するかも知れない。然し劇はそれで面白くなるかも知れないが、眞實さは減じてくるに違ひない。マリユスはまだ、悪いことは何事をも信じない年配であつた。凡てを信ずる年配は其後にしかやつて來ない。疑念は皺に外ならない。年若い青春は皺を持たない。オセロを顛倒させることもカンディードの上はたゞ滑りゆくのみである（譯者註、セクスピアの戯曲オセロ、ボオルテールの小説カンディード）。コゼットを疑ふ！さういふことはマリユスにとつては多くの罪惡よりもなほ爲し難かつたであらう。

彼は街路を歩き初めた。それは苦しむ者の普通のやり方である。彼は何か考へてゐたが、後で思ひ出せるやうなことは一つも考へてゐなかつた。夜中の二時にクールフェーラックの許に歸つて來、着物もぬがずにそのまま蒲團の上に身を投げ出した。すつかり夜が明けてから漸く彼は、あらゆる考へがなほ頭の中に往き來する重い恐ろしい眠りに陥つた。眼を覺すと丁度、クールフェーラックとアンジジョーラとフリーイーとコンプフェールとが、頭に帽子を被り、出かけるばかりの忙しさうな様子をして、室の中に立つてゐた。クールフェーラックは彼に云つた。

「君はラマルク將軍の葬式に行かないか。」

彼にはクールフェーラックの言葉も譯の分らぬ支那語のやうに聞えた。

皆が出て行つた後暫くして彼も出かけた。二月三日の事變の折ジャヴルから貰つたまゝ手許に残つてゐる二つのピストルを、彼はポケットの中に入れた。それにはまだ弾丸が込めてあつた。頭の中に如何なるひそかな考へがあつてそれを持ち出したかは、語るに困難なことである。

自ら何處とも知らないで彼は終日歩き廻つた。時々雨が降つたのをさも全く氣附かなかつた。食事のために或る麵麩屋で一錢の長麵麩を買つたが、それもポケットに入れたまゝ忘れてしまつた。何といふつもりもなしにセーヌ河にはいつて水を浴びたやうでもあつた、頭蓋骨の下に烈火が燃え立つてるやうな時もあるものである。マリユスは丁度さういふ時にはいつてゐた。もはや何一つ願はず、何一つ恐れなかつた。彼は前夜以來さういふ状態になつてゐた、そして熱し苛ら立ちながら晩になるのを待つた。たゞ一つの明かな考へのみが残つてゐた、即ち九時にコゼットに逢ふこと。この最後の幸福こそ今では彼の未來の凡てであつた。その先はたゞ闇黒のみであつた。寂しい大通りを歩いてゐると、間を置いて不思議な響きがパリーの市中に聞えるやうだつた。彼は夢幻のうちから頭を差出して云つた、

「戦争でもしてるのかしら。」

夜になる頃、丁度九時にコゼットに約束した通り、彼はブリーヌメ街に來てゐた。鐵門に近寄つた時彼は凡てを忘れた。この前コゼットと逢つてからも四十八時間、そして今再び逢へるのである。其他の考へは消えてしまひ、彼ははや異常な深い喜びをしか感じなかつた。數世紀の長い間とも思へるかゝる數分時は、常に嚴かな驚嘆すべき特質を有してゐて、過ぎ去りつゝ人の心を全く満してくれるものである。

マリユスは鐵棒を動かし、庭の中に飛び込んだ。コゼットはいつも彼を待つてゐてくれる例の所に居なかつた。彼は藪の間を通りぬけ、階段の側の奥まつた所まで行つた。「あそこ

で待つてゐるのだらう。」と彼は云つた。然しコゼットは其處にも居なかつた。眼を上げると、家の雨戸は皆閉されてゐた。庭を二廻りしたが、やはり誰も居なかつた。その時彼は家の所へ戻つて來、愛のために我を忘れ、悲しみと不安とのために惑亂し憎え苛ら立つて、時ならぬ時間に家に歸つて來た主人のやうに、雨戸をうち叩いた。叩きに叩いた。窓が開けられ父親の恐ろしい聲が現はれて「何だ？」と尋ねられる危険をも顧みなかつた。心に待ち望んでゐることに比ぶればそれは取るに足らぬことであつた。叩き終へた時、彼は聲をあげてコゼットを呼んだ。「コゼット！」と彼は叫んだ。「コゼット！」と彼は激しくくり返した。何等の答へもなかつた。萬事は終つてゐた。庭には誰も居ず、家の中にも誰も居なかつた。

マリユスは、墳墓のやうに暗く黙々として空虚なこの悲しい家に絶望の眼を据ゑた。彼はコゼットと共に幾多の楽しい時間を過した石の腰掛を眺めた。それから彼は階段の上で座り、心は優しさと決意とに満ち、胸の奥で己の愛を祝福し、コゼットが出發してしまつた今となつてはもはや死ぬの外はないと自ら云つた。

突然彼は人の聲を聞いた。それは往來から來るものゝやうで、木立越して叫んでゐた。

「マリユスさん！」

彼は身を起した。

「えい！」と彼は云つた。

「マリユスさん、あなた其處に居るの？」

「えい。」

「マリユスさん、」とその聲はまた云つた。「お友達の方があなたを、シャンヴルリー街の防寨で待つてゐます。」

その聲は彼の全く知らないものではなかつた。何だかエポニーヌの荒いつぶれた聲に似寄つてゐた。マリユスは鐵門の所に走つてゆき、動く棒を押し開き、その間から頭を出した。見ると若い男らしく思はれる一人の者が、向ふへ走り去りながら暗がりの中に消えていつた。

### 三 マブーフ氏

ジャン・ヴァルジャンの財布はマブーフ氏に何の役にも立たなかつた。マブーフ氏はその子供らしい尊い謹嚴さを以て、天の賜物を決して受納しなかつた。星がルイ金貨になり得るとは考へられなかつた。天から落ちて來たものは實はガヴロッシュから來たものであるとは、思ひつくことが出来なかつた。彼はその財布を所轄の警察署へ持つてゆき、請求者の意のまま、

に拾ひ主から屈出でた拾得物だとして置いて来た。勿論それを請求する者もなかつたが、さりとてマブーフ氏を救ふものともならなかつた。

それにまたマブーフ氏は、相變らず坂道を下へと下りつゝあつた。

藍の試培は、オーステルリッツの庭に於けると同じく、動植物園に於ても成功しなかつた。前年から婆さんの給金も借りになつてゐたが、前に云つた通り今では家賃も數期分たまつてゐた。質屋も彼の特産植物誌の銅版を、十三ヶ月預つてゐた後賣り拂つてしまつた。或る鑄物師がそれで鍋を拵へたさうである。銅版が無くなつてしまへば手許にある特産植物誌のはしたの本は完成することが出来ないで、その木版と本文とをも半端物として或る古本屋に捨値で譲つてやつた。彼にはもはや一生を費した著作物から残つてゐるものは何もなかつた。彼はその書物の代を食ひ初めた。そしてこの僅な金がつきてしまつた時、庭の仕事も止めて荒れるに任した。以前から、もうすつと以前から、時々食べる二つの鶏卵と一片の肉片とをも廢してゐた。食事は麵麩と馬鈴薯とだけになつてゐた。残つてゐる家具をも賣り拂ひ、次には夜具や着物や毛布なども二枚あるものは一枚を賣り、次には植物の標本や版畫などを賣つた。然しなほごく貴重な書物は残してゐた。そのうちには非常な珍本が幾らもあつて、特に次のやうなのは優れたものであつた。聖書歴史年譜、千五百六十年版。各聖書對照註釋、

ビエール・ドッペス著。マルグリットの諸マルグリット、ジャン・ドッラ・エー著。ナヴァール女皇への捧呈文附。大使の職責及び品位に就きて、ヴィリエ・オットマン閣下著。千六百四十四年版のユダヤ美文集一冊。「ヴェニス、マヌチアニス家に於て」といふ金びかの銘がついてる千五百六十七年版のチブリスの詩集一冊。終りにディオゼネス・ラエルチユスの著書一冊、これは千六百四十四年にリオンで印刷されたもので、中には、四百十一年と十三世紀とにヴァチカンから出た兩寫本の名高い相違が掲げてあり、また三百九十三年と三百九十四年とにヴェニスから出た兩寫本の間相違も掲げてあつて、アンリ・エスティエンヌの零細な對照の結果出來上つたものである、それからまた、ナポリの圖書館から十二世紀に出た有名な寫本の中にしかないドリテ語の全文もついてゐる。もうマブーフ氏は決して室に火を焚かず、また蠟燭を使はないやうにと明るいうちから寢床にはいつた、親しい者もなくなつたかのやうであつて、外出すればいつも人に避けられた。彼自身もそれに氣附いてゐた。子供の難澁は母の心を動かし、若い男の難澁は若い娘の心を動かすが、老人の難澁は誰からも顧みられないものである。それはあらゆる困苦のうちでも最も冷たいものである。けれどもマブーフ氏は、子供の如き清朗さを全く失つてはゐなかつた。自分の藏書を見る時には、眸に多少の元氣が現はれ、世にたゞ一部きりないディ、オゼネス・ラエルチユスを眺める時には、顔

に微笑みが上つた。硝子戸のついてるその書棚は、必要な品を除いては彼が残して置いた唯一の家具であつた。

或る日、ブリュタルク婆さんは彼に云つた。

「夕御飯を買ふ金がございません。」

彼女が夕御飯と云つたのは、實は一片の麵麩と四つか五つの馬鈴薯とであつた。

「後拂ひにしたら？」とマブーフ氏は云つた

「誰もそんなことをしてくれないのは御承知ではございませんか。」

マブーフ氏は書棚を開き、宛も自分の子を一人犠牲にしなければならぬ父親がどれにしようかと大勢の子を眺めるがやうに、藏書を長い間かゝつて一つ／＼眺め、それから急にその一冊を取り、それを脇にかゝへ、そして出て行つた。二時間たつて彼は、小脇を空にして歸つて來、卓子の上に三十錢の金を置きそして云つた。

「これで夕飯を支度してくれ。」

その時からブリュタルク婆さんは老人の清明な顔の上に暗い影がさすのを見た。その影は遂に再び晴れることがなかつた。

翌日も、その翌日も、日々同じことをくり返さなければならなかつた。マブーフ氏は一冊

の書物を持つて出かけてゆき、少しの金を手にして戻つて來た。古本屋は彼が是非とも賣らなければならぬのを見て取つて、二十法もしたものを二十錢位に買ひ取つた。時とすると同じ店でさういふ目に逢ふこともあつた。一冊一冊と藏書は減つていつた。折にふれて彼は云つた、「だが私はもう八十歳だから。」それは宛も、書物が盡きない前に自分の餘生が盡きんことをひそかに望んでゐるかのやうであつた。けれども一度彼に喜ばしいことが起つた。彼はロベール・エスティエンヌ版の書物を一冊持つて出かけ、マラケー河岸でそれを三十五錢に賣り、そしてグレー街で四十錢で買つたアルド版の書物を一冊持つて歸つて來た。「私は五錢借りた、」と彼は顔を輝かしながらブリュタルク婆さんに云つた。その日彼は夕食をしなかつた。

彼は園藝協會にはいつてゐた。會員は皆彼の貧窮を知つてゐた。會長は彼を訪れて來、彼のことを農商務大臣に話してやらうと約束し、そして實際それを果した。大臣は叫んだ、「は、あなるほど、よく分つた、老人で、植物學者で、おとなしい好人物だと、何とかしてやらすばなるまい。」その翌日、マブーフ氏は大臣邸へ晚餐の招待を受けた。彼は喜びに震へながらその手紙をブリュタルク婆さんに見せた。「これで助かつた！」と彼は云つた。定日に彼は大臣の家へ行つた。そして自分の皺くちやになつた襟飾りや、角張つた大きな古上衣や、や



たらに靴墨を塗りたてた靴などが、接待人等を驚かしたことを見て取った。誰も彼に言葉をかけなかつた。大臣すら言葉をかけなかつた。十時頃になつて、なほ何かの挨拶を待つてゐると、胸を露はにした近寄れさうにもない美しい大臣夫人が、人に尋ねてゐる聲を聞いた。「あの老人は何といふ人ですか？」彼は、徒歩で、眞夜中に、兩の降る中を自分の家に歸つて來た。而も其處へ行く時の馬車代を拂ふためにエルゼヴィル版の書物を一冊賣つたのであつた。

毎晩寝る前に、彼はディオゼネス・ラエルチユスの數頁を読む習慣になつてゐた。その書物の原文の妙味を味ひ得る位にはギリシヤ語の力があつた。今ではもうそれ以外に何の楽しみもなくなつてゐた。數週間過ぎ去つた。すると突然ブリュタルク姿さんが病氣になつた。麴屋から麴麩を買ふ金もないといふことより、一層悲しいことがあるとすれば、それは藥屋から藥を買ふ金もないといふことである。或る晩、醫者はごく高價な藥を命じた。その上、病氣は重つてきて看護婦も必要だつた。マプーフ氏は書棚を開いた。もう賣るものは何にもなかつた。最後の一冊も無くなつてゐた。残つてゐるのはたゞディオゼネス・ラエルチユスのみだつた。

彼は、世に又とないその一冊の書物を腕に抱へて、出かけていつた。千八百三十二年六月

四日だつた。サン・ジャック市門のロアイヨルの後繼者の家に行き、百法持つて歸つて來た。そして年取つた召使ひの枕頭の卓子に、五法貨幣をつみ重ね、一言も云はないで自分の室に戻つた。

翌日、夜が明けるや、彼は庭の中に横はつてゐる標石に腰を下してゐた。額を垂れ、洞みはてた花床の上にぼんやり眼を定めて、その朝中身動きもしないでゐる彼の姿が、籬越しに見られた。時々雨が降つたが、老人はそれに氣もつかぬらしかつた。午後になると、異常な響きがパリーの市中に起つた。小銃の音と群集の喊聲とのやうであつた。

マプーフ老人は頭を上げた。一人の園丁が通るのを見て彼は尋ねた。

「あれは何かね。」

園丁は鍬をかついだまゝ、極めて平氣な調子で答へた。

「暴動ですよ。」

「なに、暴動？」

「えゝ。戦いくさをしてゐます。」

「何でまた戦をするんだ？」

「さあなんだか！」と園丁は云つた。

「どちらの方だ？」

「造兵廠の方です。」

「マブーフ老人は家にはいり、帽子を取り、小脇に挟むべき書物を機械的に探したが、一冊もなかつた。「あゝさうだつた！」と彼は云つた。そして我を忘れたやうな様子で出て行つてしまつた。」

## 第十編 千八百三十二年六月五日

### 一 問題の表面

暴動は何から成つてゐるか？ 無と全とからである。次第に發してくる電氣、突然迸り出る焔、彷徨してゐる力、過ぎゆく息吹き、などからである。この息吹きは、思索する頭、夢想する腦、苦しむ魂、燃え立つ熱情、咆吼する悲慘、などに出逢つて、それらを運び去るのである。

何處へ？

何處へといふ當はない。政府や法律や他人の繁榮と横暴などを横断して何處ともなく。苛ら立つたる確信、猛り立つたる熱誠、激しい憤怒、壓伏されたる戦の本能、奮激したる若い勇氣、勇ましい盲目、好奇心、變化の嗜好、意外事の渴望、新らしい芝居の廣告を見るを好み劇場で舞臺裏の木の音を好むがやうな感情、また漠然たる憎惡、怨恨、落膽、凡て失敗を運命の罪に歸せんとする虚榮、また不快、空想、絶壁のうちに四方を閉せられたる野心、また顛覆より何かの結果を望む者、最後に最も下の方にあつては、火に燃え易い泥炭たる下

層の群集、それらが即ち暴動の要素である。

最も偉大なるもの及び最も下等なるもの、機会を待ちながらあらゆるもの、外部に彷徨する者、浮浪人、無頼漢、街頭の放浪者、寒い空の雲のみを屋根とする荒地に夜眠る者、仕事に依らずして偶然の機會のまゝに日々の麴麩を求むる者、悲惨と微賤とに屬する世に知られない者、腕を露はにしたる者、跣足のまゝの者、それらが暴動に與る人々である。

國家や人生やもしくは運命の何等かの事實に對して、ひそかな反抗を心に懷いてゐる者は皆、暴動に隣せる者であり、一度暴動が現はるゝや、身を震はし初め、旋風に吹き上げらるるのを感じ初める。

暴動は、社會の大氣の一種の龍卷であつて、或る氣温の状態によつて俄に起り、渦巻きながら、上り、馳けり、轟き、掴み取り、壊し、潰し、碎き、根こぎにし、自然の偉大なるものをも脆弱なるものをも、強き人をも弱き人をも、樹木の幹をも一筋の葉をも、凡て己のうちに巻き込んでゆく。

それに運ばるゝ者もそれに衝突する者も、共に災なる哉である。兩者とも相次いで打ち碎かれる。

それは手に掴み取つた者等に或る異常なる力を傳へる。あらゆる者に事變の力を充滿せし

むる。凡てのものを爆彈となす。一塊の石をも彈丸となし、一介の人夫をも將軍となす。

狡猾なる政畧の明言する所に依れば、政府の權力を立場とする時には多少の暴動は却つて有効である。その立論は下の通りである。曰く、暴動は政府を顛覆せずして却つて政府を鞏固ならしむる。暴動は軍隊を試練し、中流市民を結合し、警察の筋力を伸張させ、社會の骨格の力を檢證する。それは一の體操であり、殆んど衛生的とも云へるものである。皮膚摩擦の後に人が丈夫になるやうに、政府の權力は暴動の後により健康になる。

また今より三十年前には、暴動はなほ他の見地からも考察せられてゐた。

あらゆる事物には、自ら「善識」(妥當なる常識)と自稱する一の理論がある。それはアルセストに對するフィラントである。(譯者曰、モリエール作人間嫌ひの主人公——峻嚴なるアルセスト、妥協的なるフィラント)。眞と誤との間に持ち出される仲裁である。説明であり、忠告であり、多少尊大な融和であつて、非難と辯解とを交へてゐるが故に自ら智慧であると信じてゐるが、多くは半可通にすぎないものである。中庸と稱せらるゝ政治上の一派は、全くこれから出て來たものである。冷水と熱湯との中間のもので、微温湯の類ひである。深遠さを裝ひ、實は皮相にのみ止まり、原因に溯ることなく結果をのみ考察するこの一派は、半可通の學說の高みから、街頭の騷擾を叱責する。

この一派の説く所を聞け——

「千八百三十年の事實を紛糾させた諸暴動は、この大事變にその純潔さの一部を失はしてしまつた。七月革命は一陣の民衆の風であつて、その後には直ちに澄み渡つた青空が現はれた。然るに暴動は、再びその空に雲を漂はした。輿論の一致によつて先づ顯著なこの革命を、争論に墮落させた。切斷を以てなすあらゆる進歩に見らるゝ如く、七月革命のうちには秘密なる骨折の箇所がいくらかあつた。然るに暴動はそれらの骨折を目立たせた、『あゝ此處が碎けてゐる、』と人に叫ばした。七月革命の後には、人はたゞ救済をのみ感じてゐた。然るに暴動の後には、人は覆滅を感じた。

「暴動は凡て、商店を閉し、資本を低下さし、相場を恐慌させ、商賣を停め、事業を遲滞させ、破産を招致する。金融は止まる。個人の財産は不安になり、信用は亂れ、工業は脊かされ、資本は回收され、賃金は下落し、至る所恐怖のみである。あらゆる都市は皆その打撃を受ける。斯くて破滅の淵が生ずる。或る計算によれば、暴動の第一日はフランスに二千萬法の損害を來し、第二日は四千萬、第三日は六千萬の損害を來す。三日間の暴動は一億二千萬法の損害となる。即ち經濟上の結果のみを見ても、難破か敗戦かによつて六十隻の一艦隊を失はせる災害に等しいのである。

「歴史的に云へば諸暴動は確かにその美を持つてゐた。鋪石の戦は、逆茂木の戦に劣らず壯烈であり悲壯である。一方には森林の魂が籠つてをり、一方には都市の魂が籠つてゐる。一方にはジャン・シューアンが居り、一方にはジャンヌが居る（譯者曰、前者は大革命の初期に蜂起せる王黨農民の首領、後者は後にある暴動の首領）。諸暴動は、パリ市の最も獨特顯著なる性格、即ち、豪俠、献身、騒暴なる快活、勇氣は知力の一部たることを立證する學生、不撓不屈なる國民兵、商人の露營、浮浪少年の要塞、通行人のうちに在る死を恐れざる心、などを凡て眞赤に而も燦然と輝らし出した。要するに、戰士等の間にはたゞ年齢の差のみしか存しなかつた。皆同じ人種であつた。主義のために二十歳にして死ぬ者も、家族のために四十歳にして死ぬ者も、皆同じ堅忍なる人であつた。内亂に於ては常に悲しい運命にある軍隊は、細心さを豪膽さに對立さしてゐた。諸暴動は、民衆の勇敢さを示すと共に、中流市民に勇氣を教へ込んだ。

「それはいゝことである。然し凡てそれらのことは流血に價するものであらうか？ 而も流血に加ふるに、未來を暗くし、進歩を煩はし、上流の人々には不安を興へ、正直なる自由主義の人々には絶望せしめ、他國の専制政治をして革命が自ら負ひたるそれらの手傷を喜ばせ、千八百三十年に打負けたる者等をして、却つて勝利を得せしめ、吾々が云つた通りでは

ないか！ と叫びしたのである。パリイは恐らく生長させられたであらうが、一方では、フランスは確かに萎微させられたのである。なほ凡てを云ふべきであるからつけ加へるが、その間に爲されたる殺戮は、獐猛なる秩序が狂愚なる自由の上に得たる勝利を、多くは汚すものである。要するに、諸暴動は痛歎すべきものであつた。」

所謂民衆たる中流市民が喜んで満足する所の所謂智慧は、實に右の如く説くのである。吾人をして云はしむれば、諸暴動といふ餘りに廣く従つて餘りに便利なるこの言葉を排斥したい。民衆の甲の運動と乙の運動との間に區別を設けたい、一の暴動は一の海戦に等しい損害を來すか否かを問ひたくない。第一に何故海戦を持ち出すか。茲に戦役の問題が起つてくる。暴動が國難であるならば戦役は人類に下されたる天罰ではないか。それにまたあらゆる暴動は皆國難であるか。七月十四日（一七八九年）一日に一億二千萬法の損害があらうともそれが何であるか。スペインに於けるフィリップ五世の擁立は二十億法の損害をフランスにかけた。もし之と同じ損害があらうとも吾人は七月十四日を選びたい。また元來吾人はそれらの計算を排したい。それは一見理由らしく思はるれど實は只口實にすぎない。一の暴動が興へらるゝ時、吾人は暴動そのものを研究したのである。上に述べたる理權派の非難のうちには、たゞ結果のみしか問題となつてゐない。然し吾人は原因を探求したのである。

この點を次に闡明してみやう。

## 二 問題の底

世には暴動があり、また反亂がある。それは二つの憤怒であつて、一は不正であり、一は正しい。正義を基礎とする唯一のものである民主國に於ても、時として一部が權力を壟斷することがある。その時全部が崛起し、權利恢復の必要上武器を取るに至る。集團の大權に屬するあらゆる問題に於て、一部に對する全部の宣戰は反亂であり、全部に對する一部の攻撃は暴動である。テュイルリー宮殿が王を入れてゐるか或は國約議會を入れてゐるかに従つて、この宮殿を攻撃することも或は正となり或は不正となる。群衆に向けられたる同じ砲門も、八月十日（一七九二年）には不正であり、共和第一月十三日（一七九五年十月五日）には正當である。外觀は同じでも根柢は異なる。傭兵等は誤れるものを防護し（八月十日）、ボナパルトは眞なるものを防護する（共和第一月十三日）。普通選舉がその自由と主權とのうちに於て爲した所のものは、街頭の群衆によつて覆されることはない。全く文化にのみ關することに於ても同様である。群衆の本能は、昨日は清澄であつても明日は混濁することがある。同じ憤激も、テレーに對しては合理でありテュルギーに對しては不合理である（譯者曰、前者はルイ十

五世の大蔵卿にして不正政略を行ひし人、後者はルイ十六世の大蔵大臣にして大改革を施さんとせし人、機械を破碎し、倉庫を掠奪し、レールを切斷し、<sup>ドック</sup>船渠を破壊し、群衆が誤れる途を辿り、民衆が進歩の裁きを拒み、學生等がラミュー(譯者曰、デカルトの先驅者たる哲學者)を殺害し、ルソーに石を投じてスウイスより追ふ、などは皆暴動である。イスラエルがモーゼに反抗し、アテネがファシオンに反抗し、ローマがスキピオに反抗する、などは皆暴動である。パリーがバステューヌの牢獄に反抗する、これこそは反亂である。兵士等がアレキサンドルに反抗し、水夫等がクリストフ・コロンブスに反抗する、などは皆暴動であり、不信なる謀叛である。何故かなれば、コロンブスが羅針盤を以てアメリカに對して爲す所のことを、アレキサンドルは劍を以てアジアに對して爲すのである。コロンブスの如く、アレキサンドルは新世界を發見する。斯く新世界を文化に與ふことは、光明を増加する所以であつて、それに對するあらゆる抵抗は皆罪あるものとなるのである。時として民衆は自己に忠實なることを誤る。群衆は民衆に叛く。最も不思議なる一例を挙げれば、かの正當なる慢性的の謀叛たる、鹽密賣者等の血に塗れたる長い間の抗議である、愈々最後の瞬間に、救済の日に、人民の勝利の時に當つて、それは王位に味方し、シューアーヌリー(譯者曰、大革命の初期に蜂起せる王黨農民の暴動)と變じ、敵たる反亂をして味方たる暴動たらしめたのである。無智の暗い傑作では

ないか。この鹽密賣者は、王室の絞首臺を脱れ、而も首に絞首繩の一片を残したまふ、白の帽章(譯者曰、白は王黨のしるしである)をつける。「鹽税を廢せよ」の叫びから、「國王萬歲」の叫びを産み出すのである。またサン・バルテルミーに於ける虐殺、九月(一七九二年)の斬殺、アヴィニオンに於ける殺戮、コリニーの殺害、ランバル夫人の殺害、ブリュヌの殺害(譯者曰、後の三人は皆それ以前の三つの虐殺の折の犠牲者である)、ピレネー黨の難、青リボン黨の難、辮髮黨の難、ゼヌの仲間の難、小手當の騎士の難(譯者曰、以上は大革命より王政復古の前後に起りし各地の小亂)、などは皆暴動である。ヴァンデの戦はカトリック派の大暴動である。

動きゆく權利の響きはよく自身を知るものであり、混亂せる群衆の震へより常に出づるものではない。世には狂愚なる憤怒があり、破鐘がある。あらゆる警鐘は皆青銅の音を出すものではない。熱情と無智との動搖は進歩の振動とは異なる。蜂起するもよし、然しそは生成せんがためのものであれ。何れの方角へ行かんとするかを自ら指示せよ。反亂は皆前方へ向つて進むものに限る。其他の蜂起は悪しきものである。暴虐なるあらゆる後退は皆暴動である。後退は人類に反する違法の行爲である。反亂は眞理の過激なる怒りである。反亂が動かす鋪石は權利の閃めきを迷しらす。然しそれらの鋪石は、暴動に向つては泥をしか與へない。ダントンはルイ十六世に反抗するは反亂であり、エベールがダントンに反抗するは暴動で

ある。

斯かるが故に、ラファイエットの云つた如く、反亂は至當の場合には最も神聖なる義務となり得るとすれば、暴動は最も痛むべき加害となり得るものである。また兩者の間には、温素の強度の差も存する。反亂は多く噴火山であり、暴動は多く藁火である。

前に云つた如く、謀反は時として政府の権力のうちにある。ポリニャックは一の暴動家であり、カミーユ・デムーランは一の統御者である。

時として、反亂は即ち復活である。

普通選挙に依る萬事の解決は全然近代の事實であり、この事實より以前の全歴史は、四千年の昔より、侵害せられたる権利と民衆の苦しみとに満たされてゐるが故に、歴史の各時代には皆可能なる抗議が現はれてゐる。ローマ諸皇帝の下には、反亂は存しなかつたが然しジュヴェナルが居た。

憤怒は作る(譯者註、憤怒は詩を作る—ジュヴェナルの言葉)がグラッキス兄弟の後を繼いでゐる。諸皇帝の下には、實にシエーヌの孤客(ジュヴェナル)が居り、またローマ年代記の作者(タシチウス)が居る。

パトモス島の廣大なる亡命者(ヨハネ)のことは茲に云ふまでもない。彼も亦、現實の世界に理想の世界の名に於ける抗議を浴びせかけ、幻覺を以て巨大なる諷刺となし、一種のローマたるニニヅエやバビロンやソドムなどの上に、默示録の燃え立つ光りを投げかけてゐる。

巖の上のヨハネは、斷崖の上のスフィンクスである。吾々はその言葉を解くことを得ない。それはユダヤの人であり、ヘブライの言葉である。然しローマ年代記を書いた者は、一のラテン人であり、なほ云へば一のローマ人である。

ネロの如き皇帝等が闇黒なる政治を行ふ時、彼等はあるがまゝに描寫せられなければならない。筋を刻むだけでは影薄いであらう、その刀痕のうちには刺すが如き的確なる散文を注ぎ込まなければならない。

専制君主等も思想家にとつては何かの役に立つ。鎖に繋がれたる言葉こそは恐るべき言葉である。緘黙が一の君主より民衆に強ひらるゝ時、筆を執る者はその文體を二重にし三重にする。かゝる沈黙からは或る神祕なる充實さが生れて來、やがては思想のうちに澱み凝集して青銅となる。歴史の壓縮は歴史家の簡結を生み出す。或る有名なる散文の花崗石的堅牢さは、暴君によつて爲されたる壓縮に外ならない。

暴政は、筆を執る者をしてその視野の直径を縮めしむる。然しそれは却つて力を増さしむ

るものである。シセロの章句は、漸くヴェレスに關してのみ充分であつて、カリグラに關しては刃が鈍いであらう。然し文野の廣濶さは少いが、打撃の強さは大である。またタシチウスは腕は縮めて思索してゐる。

偉大なる心の正直さは、正義と眞理とに凝り固る時、物を撃破する。

序に一言するが、タシチウスが年代的にシーザーの上に重ねられてゐないことは注意すべきである。彼にはチベリウス等が與へられてゐる。シーザーとタシチウスとは相次いで起る二つの現象であつて、各時代の舞臺を監督し出入人物を規定する上なる者は、その會合を不思議に避けさせてゐるがやうである。シーザーは偉大であり、タシチウスは偉大である。神はこの二つの偉大を惜しんで、互に衝突させない。この裁斷者(タシチウス)もシーザーを攻撃する時には餘りに過ぎたる攻撃となり不正となるかも知れない。神はそれを欲しない。アフリカ及びスペインの大戦役、シリシアの海賊の討滅、ゴールやブリテンやゲルマニーなどへの文化の輸入、それらの光榮はルビコンの男(シーザー)を蔽うてゐる。赫々たる篡奪者の上に恐るべき歴史家を解き放つことを躊躇し、シーザーをしてタシチウスを免れしめ天才に酌量すべき情狀を與へる、其處にこそ天の審判の微妙な思ひやりが存するのである。

天才たる専制君主の下にあつても、専制はやはり専制である。傑出したる暴君の下にも腐敗はある。然し道徳上の悪疫は破廉恥なる暴君の下に於て更に嫌惡すべきものがある。斯かる治世には汚辱は赤裸のままに存在する。そして、タシチウスやジュヴェナルの如く範例を垂れんとする者等が、人類の面前に於て、かゝる答ふる術を知らない破廉恥を攻撃するは、一層有益となるのである。

ローマはシルラの下よりヴィテリウスの下に於て一層悪い匂ひを放つ。更にクロードイウスやドミチアンの下に於ては、暴君の醜惡に相當する畸形なる下等さがある。醜汚なる奴隸等は専制君主から直接に生れ出で、主人の姿を反映する。それらの澱んだる良心からは一種の毒氣が立ち上り、公衆の權威は汚れ、人の心は小さく、良心は平べつたく、魂は臭い。カラカラの下に於てもさうであり、コモデウスの下に於てもさうであり、ヘリオガバリウスの下に於てもさうである。然るに、シーザーの下にあるローマの元老院からは、鷲の巢に固有な糞尿の匂ひしか發しない。

斯くてタシチウスやジュヴェナルの如き者等が到來する。それは一見遲きに失するやうであるが、指摘者の出現するは正しく自明の時に於てある。

然しながらジュヴェナルやタシチウスは、舊譯時代のイザヤと同じく、中世のダンテと同じ



く、共に人間である。されど暴動や反亂は群集であつて、或は不正となり或は正當となる。最も普通の場合には暴動は物質的事實より發する。然るに反亂は常に精神的の現象である。暴動はマザニエロであり、反亂はスバルタキニスである（譯者曰、前者は十七世紀ナポリ亂徒の首領たる漁夫、後者は一世紀反抗奴隸の首領）。ガステル（譯者曰、ラブレの創り出せる胃袋を意味する人物）は奮激する。然しガステルとても常に不正なるものではない。饑餓の問題に於ては暴動も、例へばプーザンセーのその如く、眞と悲壯と正義との出發點を有する。然れどもそれはやはり暴動である。何故であるか？ 根柢には理由を持ちながら形式のうちに不正を有したからである。權力を持つてはゐるが殘忍であり、力強くはあるが暴戾であつて、何等の見境もなく打ち廻つた。他を踏み潰しながら盲目の象のやうに進んでいつた。その後ろには、老人や婦人や子供の死骸を残した。自ら何の故かを知らないで、無害なる者や無辜なる者の血を流したのである。民衆に食を與へんとするは善き目的である、虐殺は惡き方法である。

凡て武器を取つたる抗議は、最も正當なるものでさへも、八月十日（一七九二年）でさへも、七月十四日（一七八九年）でさへも、皆初めは同じ狂亂に陥つてゆく。權利が鞭を脱する前に、騷擾と泡沫とがある。大河の初めは急湍である如く、反亂の初めは暴動である。そし

て普通は革命の大洋に到達するものである。けれども時としては、精神的地平の上に聳ゆる高山たる正義と智慧と道理と權利とより發し、理想の最も純なる雪より作られ、岩より岩へと長い墜落をなした後、その清澄のうちに青空を反映し、無數の支流を集めて大きくなり、勝利の嚴かなる歩みにはいつた後、宛もライン河が沼澤のうちに入り込む如く、反亂は或る中流市民の泥濘のうちに突然姿を沒することがある。

然し、凡てそれらは過去のことである。未來はそれと異なる。普通選舉は驚歎すべき特質を有してゐて、暴動をその原則に還元し、また反亂に投票を與へながらその武器を奪ふ。市街戦と國境戦とを問はず凡て戦役の消滅、それこそ必然の進歩である。今日は如何であらうとも、平和は「明日」である。

なほまた、反亂と暴動と、兩者を區別する前述の如き色合を、本來の中流市民は知る所甚だしい。中流市民にとつては、凡て皆、謀反であり、單純なる反逆であり、主人に對する番犬の反抗であり、鎖と檻とを以て罰すべき咬みつかんとを試みであり、吠え聲であり、叫び聲である。但しそれも、犬の頭が俄に大きくなり、獅子の面前に於て影のうちに臙ろに浮き出してくる、その日までのことである。

その日になつて中流市民は叫ぶ、「民衆萬歳！」

以上の説明を施した後、さて歴史にとつて、千八百三十二年六月の騒動は何であるか？  
それは一の暴動であるか、または一の反亂であるか？  
それは一の反亂である。

然しこの恐るべき事變の道具立を見て、時として吾人は暴動だと云ふこともあるであらう。但しそれも、事實を表面から形容せんために過ぎないものであり、暴動的形式と反亂的根幹との間に常に區別を設けてのことである。

千八百三十二年のこの騒動は、その急激なる爆發とその悲しき終滅とのうちに、多くの壯大さを持つが故に、其處に一暴動をしか認めない者等でさへも、それを語るには尊敬の念を禁じ得ないであらう。彼等にとつては、それは千八百三十年（七月革命）の名残りの如きものである。彼等は云ふ。動搖したる想像は一日にして靜まるものではない、一の革命は一舉にして斷ち切らるゝものではない、平和の状態に戻る前には必然に多少の波瀾が常にあるものであり、宛も平野の方へ下りゆく山岳の如きものである、アルプス山脈には常にジュラの小脈がついてをり、ピレネー山脈には常にアステューリーの小脈がついてゐる。

パリー人の腦裏で暴動の時期と稱する、現代史中のこの壯烈なる危機は、本世期の幾多の騒擾の時期のうちにも、たしかに獨特の性質を有する一時期である。

物語りにはいる前になほ最後に一言つけ加へたい。

次に語られんとする事柄は、劇的の生きたる現實に屬するものであるが、往々にしてその隙と場所とがないために歴史家から等閑に附せられることがある。けれども其處には、吾人は主張したい、其處には、人の生命と喘ぎと戦慄とがある。前に一度述べたと思ふが、小さな個々の事柄は、云はゞ大なる事變の枝葉の如きものであつて、歴史の遠方に見えなくなつてゐる。所謂暴動の時期には、この種の細事が無數にある。裁判上の調査も、歴史とはまた異つた理由から、凡てを發表してをらず、また恐らく凡てを深く穿鑿してもゐない。故に吾人は、世に知られ公にせられてる特殊の事のうちから、特に人の嘗て知らなかつた事柄を、また知つてゐた者からも或は忘れられ或は死なれてゐる事實を、これから明るみに持ち出さんとするのである。この勇壯なる舞臺に實際立つた人々の多くは、既に姿を消してゐる。その翌日より早くも彼等は一切口を噤んでゐる。然し吾人がこれから語らんとする所のことには、自ら目撃したことであるとも云ひ得るものである。吾人はその人物の名前を少しく變へるであらう、何故なら歴史は物語るものであつて摘發するものではないから。然し吾人は眞實の事柄を描くであらう。また本書の性質上よりして、吾人が示す所のはたゞ、千八百三十二年六月五日及び六日兩日の、確かに世に知らるゝこと最も少い一方面的のみであり一挿

話のみであらう。然しその上げられたる暗いヴェールの下に、この恐るべき民衆の暴擧の真相を讀者が垣間見んことを、吾人は期したのである。

### 三 埋葬——再生の機會

千八百三十二年の春、三ヶ月以來コレラ病は人心を恟々たらしめ、一般の動搖の上に一種陰鬱な緩和を投じてはゐたけれども、パリは既に長い前から將に爆發せんとしてゐたのである。前に述べたやうに、大都市は一門の砲の如きものである。彈丸がこめられてゐる時は、一の火花が落ちかゝりさへすれば直ちに發射する。千八百三十二年六月には、その火花はラマルク將軍の死であつた。

ラマルクは、名聲の高い活動的人であつた。彼は帝政と王政復古との下に於て、兩時代に必要なる二つの勇氣を相次いで持つてゐた、即ち戦場の勇氣と演壇の勇氣とを。勇敢であつた如くまた雄辯であつた。その言論のうちには劍の刃が感ぜられた。先輩たるファアの如く、指揮權を高くかさした後に自由を高くふりかさしてゐた。左黨と極端左黨との間に席を占め、未來の機會を許してゐたがために民衆から愛せられ、嘗て皇帝に仕へてゐたがために群衆から愛せられてゐた。ゼラール伯及びドルーエ伯と共に、ナポレオン胸中の元帥等の一

人であつた。千八百十五年の條約には、身に親しく侮辱を受けたかのやうに激昂した。直接の憎惡を以てウエリントンに憎んだ。この憎惡は群衆の氣に入るものであつた。其後十七年間、彼は殆んど中間の事變には注意も拂はず、ワートルローを痛むの念を嚴かに守つてゐた。臨終の苦悶のうちには、最期の時には、百日（譯者曰、ナポレオン再擧の百日間）の將校等から與へられた一本の劍を胸に抱きしめてゐた。ナポレオンは軍隊といふ一語を發して死んだが、ラマルクは祖國といふ一語を發して死んだ。

彼の死は豫期せられてはゐたが、民衆からは一の損失として恐れられ、政府からは何かの機會として恐れられてゐた。その死は一般の喪となつた。然し凡て悲痛なるものと同じく、喪も騒亂となることがある。それが今正しく起つたのである。

ラマルクの葬式の定日たる六月五日の前日とその朝、サンタントアール廓外は、葬式の行列がすぐ側を通るといふので、恐るべき光景を呈した。その網の目の如く入り亂れた騒がしい小路は、流言を以て満たされた。人々は出来るだけの武装をした。或る指物師等は、「戸を破るため」に鐵の鉤金を持ち出した。また靴工の編針の先を折りその棒を尖らして短劍を拵へた者もあつた。また「攻撃」の熱に浮されて三日間着物を着たまゝ寝た者もあつた。ロシビエといふ一人の大工は、途で仲間の一人に逢つて尋ねられた。「何處へ行くんだ。」俺に

は武器がねえ。」「だから？」「仕事場にコンパスを取りに行くんだ。」「何のために？」「何のためだか俺にも分らねえ、」とロンビエは云つた。ジャクリーヌといふ事業家は、労働者が通りかゝると誰構はずに近寄つて行つた。「一緒に来い。」そして彼は十錢の葡萄酒を奢つて、云つた。「お前は仕事があるか。」「いゝえ。」「ぢやあフィスビエールの家に行け。モントルーイ市門とシャロンヌ市門との間だ。仕事がある。」「フィスビエールの家に行くと、彈藥と武器とがあつた。名の知れてる或る首領等は郵便脚夫をやつてゐた、即ち人を呼び集めるために方々の家に走り廻つてゐた。トロレーヌ市門の側のバルテルミーの家や、ブティーシャポーのカベルの家では、酒を飲んでる者等が眞面目な様子で寄り集つてゐた。彼等が互に語り合ふ言葉も聞かれた。「ピストルはどこに待つてゐるんだ。」「上衣の下だ。そしてお前は？」「襯衣の下だ。」「ローランの工場の前のトラヴェルシエール街や、機械屋ベルニエの工場の前のメーゾン・ブリューレ中庭には、大勢の人が集つてひそ／＼話をしてゐた。その中でマヴァーといふ男は最も熱心だつた。「あいつとは毎日口論しなけりやならないから」と云つていつも主人から解雇され、同じ工場に一週間と續けて居たことの無い男である。その翌日マヴァーは、メニルモンタン街の防塞で殺された。また同じく戦ひ中に死ぬに至つたブルトーといふ男は、マヴァーを助けてゐた。そして「お前の目的は何だ」と問はれたのに對して答へた、「反亂だ。」「ベル

シー街の隅に集つてゐる労働者等は、サン・マルソー岬外に、つた革命委員たるルマランといふ男が歸つて来るのを待つてゐた。暗號は殆んど公然と云ひ交はされてゐた。

六月五日は降つたり晴れたりする日であつたが、ラマルク將軍の葬式の行列は、用心のため一層嚴めしくされた陸軍の盛儀を以てパリーを横ぎつていつた。太鼓に喪紗をつけ小銃を逆に立てた二大隊の兵士、帶劍の一萬の國民兵、國民軍の砲兵隊、などが柩を護衛してゐた。棺車は青年等に引かれてゐた。癡病院の將校等が、月桂樹の枝を持つてすぐ棺車の後に従つた。その次には動搖せる異様な無数の群集がやつて來た、人民の友の各區隊、法律學校の生徒、醫學校の生徒、各國からの亡命客、スペインやイタリーやドイツやポーランドの旗、横の三色旗、其他ありとあらゆる旗、生木の枝を打振つてる子供、その時丁度罷工してゐた石工や大工、紙の帽子でそれと見分けられる印刷職工、さういふ者等が、三々五々打連れ立つて、喊聲を上げ、大抵皆杖を振廻し、或者はサーベルを振廻し、秩序はなかつたが一つの魂となり、或は群がり或は縦列をなして進んだ。各一群れはそれ／＼隊長を選んでゐた。公然とピストルを二挺身につけてゐた男が、宛も閲兵でもするやうな風でかけ廻り、各列はその前に途を開いた。大通りに交叉してゐる横丁や、並木の枝の間や、露臺や窓や屋根の上には、男や女や子供の頭が重り合ひ、その眼には不安の色が満ちてゐた。通つてゆくのは武装した

群集であり、眺めてゐるのは憎えた群集であつた。

政府の方では眼を配つてゐた。劍の欄に手をかけて眼を配つてゐた。ルイ十五世廣場には、馬に跨り喇叭手を先頭にした四個中隊の重騎兵が、彈藥盒を脹らし小銃や短銃に彈丸をこめ、今にも行進せんとしてるのが見られた。ラタン町や動植物園の附近には、市の守備兵が街路毎に並んでゐた。葡萄酒市場には龍騎兵の一個中隊、グレーヴには輕騎兵第十二大隊の半數、バステューユに他の半數、セレスタンに龍騎兵第六大隊、ルーヴルの中庭には砲兵が一杯になつてゐた。其他の軍隊は各兵營のうちに屯して居り、その上パリ近郊の各聯隊は云ふまでもないことである。不安な政府は、恐ろしい群集の上に、市中に二萬四千の兵士と市外に三萬の兵士とを配つてゐた。

種々の風説が行列のうちには流布されてゐた。正統派の陰謀があるとも云はれてゐた。群集が帝國の上に頂かんと指名した時に神より死を定められたライヒシュタット公(ナポレオン二世)、彼のことも語られてゐた。誰だか今に不明である一人の男は、買収された二人の副長が約束の時に或る兵器廠の門を人民に開いてくれることになつてゐる、と云ひふらしてゐた。多くの人々の露は額の上には、重荷を負つたやうな興奮の色が特に著しく漂つてゐた。また、激烈な然し立派な情操に囚はれてゐるその群集の中には、全く悪人の顔附と「掠奪

しろ」と叫ぶ卑しい口とも、あちらこちらに見えてゐた。或る種の動搖は、沼の底を攪拌して氷の中に泥の濁りを立たせるものである。「立派な」警官等にはよく分つてゐる現象である。

行列は極めてゆるやかに、死者の家から各大通りを通つてバステューユまで進んでいつた。時々雨が降つたが、その群集は一向平氣であつた。その間にはいろんな出来事が起つた。樞はヴァンドームの圓塔(大陸軍記念塔)のまはりを行廻された。帽子を被つたまゝ露臺に居たフィツ・ゼームス公に多くの石が飛んだ。ゴールの鶏(譯者曰、フランス國民の一標章)が或る國旗から裂き取られて泥の下に踏み蹂られた。サン・マルタン市門で一人の巡查が劍の突傷を受けた。輕騎兵第十二大隊の一將校は「僕は共和黨だ」と聲高に云つた。工藝大學の生徒等が禁足の令を破つて突然現はれた。「工藝大學萬歲! 共和萬歲!」の叫びが起つた。斯くてバステューユまで來ると、恐るべき野次馬の長い列がサン・タントアール廓外から現はれて來て、行列に加はつた。群集は或る恐ろしい沸騰を來し初めた。

一人の男が傍の男にかう云つてるのが聞かれた。「あの赤髯の男を見てみる。愈々やつゝける時にはあの男が相圖をするんだぜ。」この赤髯の男は、後にケニセー事件の暴動の時にも同じ役目を帯びて居たらしい。

棺車はバステューエを過ぎ、運河に沿ひ、小さな橋を渡り、オーステルリッツ橋の前の廣場に達し、其處で止つた。その時群集を俯瞰したら彗星のやうな形になつてゐたに違ひない。その頭は橋の横場にあり、その尾は、ブールドン河岸の上に擴がり、バステューエを蔽ひ、大通りの上をサン・マルタン市門まで伸びてゐた。棺車のまはりには人垣が出來てゐた。廣い群衆はひつそりと静まつてゐた。ラファイエットがラマルクに別れの弔辭を述べた。それこそ悲痛森嚴な瞬間であつて、人々は皆帽をぬぎ胸を躍らした。と忽ち、黒衣を纏つた馬上の男が、赤旗——或は赤帽(革命の帽)を被せた鎗だといふ者もあるが——を持つて群集の眞中に現はれた。ラファイエットは向き返つた。エグゼルマンヌは棺側を去つた。

この赤旗は群集のうちに暴風を起してその中に姿を没した。ブールドン大通りからオーステルリッツ橋まで、津波のやうな響きが起つて群集を沸き立たした。恐ろしい二つの叫びが起つた。「ラマルクを、パンテオンへ」「ラファイエットを市廳へ」「青年等は群集の喝采のうち、自ら馬の代りとなつて、棺車の中のラマルクをオーステルリッツ橋の上に引き初め、ラファイエットを辻馬車に乗せてモルラン河岸に引き初めた。

ラファイエットを取り巻き喝采してゐる群集の中に、ルドウィヒ・シュニーデルといふ一人のドイツ人が居るのを見て人々は注意し合つた。この男は其後百歳近くまで生き長らへたが、以前千七百七十六年の戦争(アメリカ獨立戦争)にはいつて、トレントンではワシントンの下に戦ひブランデーワインではラファイエットの下に戦つたことがあつた。

そのうちに、河の左岸には市の守備騎兵が動き出して橋を遮り、右岸には龍騎兵がセレストンから現はれて來てモルラン河岸に沿つて展開した。ラファイエットの馬車を引いてゐた者等は、河岸の曲り角で突然それに氣付いて、「龍騎兵だ、龍騎兵だ！」と叫んだ。龍騎兵等は、ピストルを革の袋に入れ、サーベルを鞘に納め、短銃を鞍側につけたまゝ、陰鬱な期待を有してゐるかのやうな風で、黙々として馬を並足に進ましてきた。

小さな橋から二百歩の所で彼等は止つた。ラファイエットの馬車が其處まで行くと、彼等は列を開いて馬車を通し、その後からまた列を閉じた。その時龍騎兵等と群集とは相接した。女等は恐怖して逃げ出した。

その危急な瞬間に何が起つたか? 誰もそれを云ふことは出來ないであらう。それは二つの黒雲が相交る暗澹たる瞬間である。襲撃の喇叭が造兵廠の方に聞えた、と或る者は云ひ、一人の少年が龍騎兵に短劍を刺した、と或る者は云ふ。事實を云へば、突然小銃が三發發射せられたのであつて、第一發は中隊長シローレを殺し、第二發はコントレスカルブ街で窓を閉してゐた聾の老人を殺し、第三發は一將校の肩章を打ち落した。一人の女は叫んだ、「まだ

初めるには早い」その時突然、兵營の中に屯してゐた一個中隊の龍騎兵が、拔劍で馬を躍らして現はれ、バソンピエール街からブルドン大通りを通つて前に在るものを逐ひ拂ひながらやつて來るのが、モルラン河岸の向ふ側に見られた。

その時事は定つた。暴風は荒れ出し、石は雨と降り、小銃は火蓋を切つた。多くの者は河岸の下に飛び下り、セーヌ河の小さな枝を渡つた。この小川は今日では埋つてしまつてゐる。ルーヴィエ島の造船場は、すつかり固められた要塞となつて、戦士等が群つた。石は引拔かれ、ピストルは發射され、防塞は設けられ、追ひまくれた青年等は棺車を引いてオーステリッツ橋を駆けぬけ市の守備兵を襲ひ、重騎兵はかけつけ、龍騎兵は薙ぎ立て、群集は四方に散亂し、戦の風説はパリーの隅々まで擴がり、人々は「武器を取れ」と叫び、走り、躓き、逃げ、或は抵抗した。風が火を散らすやうに、憤怒の念は暴動を八方に擴げていつた。

#### 四 沸騰

凡そ世に暴動の最初の蜂起ほど驚くべきものはない。凡てが各處で同時に破裂する。それは豫期せられてゐたことであるか？ 然り。それは前以つて準備せられてゐたことであるか？ 否。それは何處から起つてくるか？ 街路の鋪石からである。それは何處から落ちて

くるか？ 雲からである。或る所では反亂は豫め計畫された性質を帯び、或る所では啗嗟に起つた性質を帯びてゐる。誰といふことなく其處に居合した男が、群集の流れを我物にして欲するまゝにそれを導く。その發端は、一種の恐るべき快活さが交つてゐる驚怖のみである。初めはたゞ騷擾の聲であり、商店は閉され、商品の陳列棚は姿を消す。次には時々銃聲が聞え、人々は逃げ出し、大きな門は銃床尾に亂打される。人家の中庭では女中等が面白がつて、「騒動がもち上るのよ」と云ふ聲が聞える。

十四五分とたまないうちに、パリーの各所で殆んど同時に起つたことは、大凡次のやうであつた。

サント・クロア・ド・ラ・ブルトンヌリ街では、髯を生やし髪の毛を長くした二十人許りの青年が、或る喫煙珈琲店にはいり込み、やがて間もなく出て來た所を見ると、喪紗のついた横の三色旗を一つ押し立て、その先頭には武装した三人の男が、一人はサーベルを持ち一人は小銃を持ち一人は鎗を持つて進んでゐた。

ノナンディエール街では、腹が脹れ、聲が大きく、頭が禿げ、額が高く、黒い鬚をはやし、撫でつけることの出來ない荒い口髭をはやし、相當な服装をした一人の市民が、通行人に公然と彈藥を配つてゐた。

サン・ピエール・モンマルトル街では、腕を露にした數名の男が黒い旗を持ち廻つてゐた。その上には白い文字が讀まれた、「共和か然らずんば死。」ジュノーヌル街、カドラン街、モントルグイ街、マンダル街などには、旗を打ち振つてゐる群が現はれた。旗には金文字で數字のついた區隊といふ語が見えてゐた。それらの旗の一つは、殆んど赤と青とばかりで、白はその間に小さく見えない位にはいつてるのみだつた。(譯者曰、三色旗の白は王家の章、赤と青はバリー市の章。)

サン・マルタン大通りの兵器廠は掠奪され、次にポーブル街とミシユル・ル・コント街とタンプル街とで三軒の武器商店が掠奪せられた。數分間のうちに、大抵皆二重銃身の二百三十の小銃と、六十四のサーベルと、八十三のピストルとが、無數の群集から奪はれ持ち出された。なるべく多くの者に武装させんため、或者は銃だけを取り、或者は銃の劍だけを取つた。グレーヴ河岸と向ひ合つた所では、火繩銃を持つた青年等が、女ばかりの家に陣取つて發火した。その一人は燧石銃を持つてゐた。彼等は發射し、家の中にはいり、それから彈藥を作りはじめた。女等の一人はかう話した。「私は彈藥とはどんなものだか知らなかつたので、すが、良人がそれを教へてくれました。」

ヴィエイユ・ゾードリエット街では、一群の者が或る古物商の店に闖入し、トルコの刀や武器

を奪つた。

銃殺せられた一泥工の死體が、ペール街に横はつてゐた。

それからまた、セーヌの右岸左岸、河岸通り、大通り、ラタン町、市場町などには、勞働者や學生や區隊の者など息を切らしてゐる人々が、宣言書を読み、「武器を取れ」と叫び、街燈を壊し、馬車の馬を解き放し、街路の鋪石をめくり、人家の戸を打ち破り、樹木を根こぎにし、善の中を探り廻り、樽を轉がし、鋪石や漆喰や家具や板などをつみ重ね、防塞を作つてゐた。

人々は市民にも助力を強請した。また女ばかりの家にはいり込み、不在の良人が持つてゐるサーベルや銃を奪ひ、白堊でその戸口に、「武器徴發濟」と書きつけた。或者は、銃とサーベルの受領證に「名前を」署名し、「明日區役所に取り来い」と云ひ置いた。また往來で、孤立した哨兵や區役所に行く國民兵等の武器を奪つた。將校の肩章を裂き取つた者もあつた。シムティエール・サン・ニコラス街では、國民兵の一將校が、棒や竹刀を持つた群集に追つかかれ、漸くにして或る人家に逃げ込んだ。然し彼は其處から、夜になつて變装してゐなければ、出ることが出来なかつた。

サン・ジャック町では、學生等が群をなして宿から出て來、サン・ティヤサント街に行つてプロ



グレイ珈琲店には入り込み、或はマテラン街に行つてセイ・ビヤール珈琲店には入り込んだ。兩方共戸の前には、標石の上に若い男等がつゝ立つて武器を配つてゐた。トランスノナ街の材木小屋は、防寨を作るために掠奪せられた。たゞサント・アヴァア街とシモン・ルフラン街の交叉點だけでは、住民等が抵抗して自ら防寨を破つた。たゞ一つの場所では暴徒の方が後退した、即ち彼等は、國民兵の一支隊に銃火を浴せた後、タンブル街に作りはじめた防寨を捨て、コルドー街の方から敗走した。支隊はその防寨の中に、一本の赤旗と一包みの彈藥と三百のピストルの彈丸とを拾つた。國民兵等はその旗を引裂き、破片を劍の先につけて持ち去つた。

吾人が茲に相次いで徐々に述べてゐる事柄は皆、宛も只一つの雷鳴の中に閃めく多くの電光のやうに、廣い騷擾のうちに市中の各所で同時に起つたのである。

一時間足らずのうちに、市場町の中だけでも二十七の防寨が地面から出て來た。その中央には有名な五十番地の家があつた。この家は、ジャンヌとその百六人の仲間の要塞であつて、一方にはサン・メーリーの防寨を控へ、一方にはモーブエ街の防寨を控へ、アルシ街とサン・マルタン街と正面のオーブリー・ル・ブーシ街と、三つの街路を指揮してゐた。また直角をなした二つの防寨は、一つはモントルグイ街からグラントトリュアンドリーの方へ折れ曲つて

をり、一つはジッフロア・ランジュヴァン街からサント・アヴァア街の方へ折れ曲つてゐた。其他パリーの他の多くの町やマレー廓やサント・ジュヌヴィエーヴの山などに、無数の防寨が出來た。メニルモンタン街にあつた防寨には、眩金からもぎ取られた大きな門扉が見えてゐた。オーテル・ディユーの小橋の側にあつた防寨は、馬を解き放してひつくり返した大馬車で出來てゐて、警視廳から實に三百歩の所であつた。

メネトリエ街の防寨では、立派な服装をした一人の男が働いてゐる者等に金を分配してゐた。グルネタ街の防寨では、騎馬の男が一人現はれて、防寨の首領らしく思へる者に金包みらしいものを手渡しした。「これは入費や酒や其他の代だ、」と彼は云つた。襟飾りの無い金髪の一人の青年が、各防寨の間を駆け廻つて命令を傳へてゐた。劍を抜き青い警官帽を被つたも一人の男は、方々に哨兵を出してゐた。各防寨の内方では、居酒屋や門番小屋などが衛舎に變つてゐた。その上にこの暴動は、極めて巧妙なる戦術によつて按排されてゐた。狭く不規則で曲りくねつて角や眩の一杯ある街路が、見事に選まれてゐた。特に市場附近はさうであつて、各小路は入り亂れて森の中より更に紛糾した網の目を作つてゐた。人の噂では、人民の友の仲間がサント・アヴァア町で反亂の指揮を握つてゐた。ポアンソー街で殺された一人の男の死體を探すと、パリーの地圖がポケットから出て來た。

然し實際この暴動の指揮を取つてゐたものは、空中に漂つてゐる云ひ知れぬ一種の慄悍なる氣であつた。反亂は俄かに、一方の手で防塞を築き、一方の手で殆んど凡ての要所を掴んでしまつた。三時間足らずのうちに、燃え擴がる一條の導火線のやうに、暴徒は各所を襲つて占領した。即ち、セーヌ右岸では、造兵廠、ロアイヤル廣場の區役所、マレーの全部、ポバンクール兵器廠、ガリオト、シャトードー市場附近の全市街、またセーヌ左岸では、ヴェテランの兵營、サント・ペラジー、モーベール廣場、ドゥー・ムーランの火藥庫、市門の全部。午後の五時には、バステューヤランジュリーやブラン・マントーも暴徒の手に歸した。その搜索兵はヴィグドール廣場に達し、フランス銀行やブティール兵營や中央郵便局などを脅かしてゐた。パリーの三分の一は暴動の中にあつた。

各方面に於て戦闘は猛烈に行はれてゐた。そして敵の武器を奪ひ、人家の中を搜索し、武器商の店に直ちに侵入したために、戦は投石に初つたが次では銃火を以てするに至つた。

晩の六時頃、ソーモンの通路は戰場と化した。暴徒はその一端に居り、軍隊は他端に居た。彼等は鐵柵から鐵柵へ銃を打ち合つた。一人の傍觀者、一人の夢想家、即ち本書の著者は、その火山を間近に見物に行き、この通路の中で銃火に挟まれた。銃弾から身を護るためには、商店の間々に少し出てゐる半圓柱しか何もなかつた。彼はその危い位地に約三十分近くも身を置いてゐた。

そのうちに召集の譜は鳴り、國民兵等は遽しく服をつけ武器を取り、各隊は區役所から繰り出し、各聯隊は兵營から現はれて來た。アングルの通路の向ふでは、一人の鼓手が短劍で刺された。また一人の鼓手はシーニエ街で約三十名の青年に襲はれて、太鼓の胴は破られ、劍は奪はれた。また一人はグルニエサン・ラザール街で殺された。ミシユル・ル・コント街では、三人の將校が相次いで斃れた。多くの國民兵は、ロンパール街で負傷して退却した。

パターヴ中庭の前で、國民兵の一支隊は一本の赤旗を發見した。それには、「共和革命、第百二十七」と誌してあつた。果してそれは革命であつたらうか？

反亂はパリーの中央を以て、錯雜し曲りくねつた巨大なる一種の城砦となしてゐた。

其處にこそ焦點があり、明かに問題があつたのである。其他は單なる撒戦にすぎなかつた。其處で凡てが決する證據には、其處ではまだ戦は初つてゐなかつた。

或る聯隊では、兵士等が不確實であつた。そのために一層危機の恐ろしい不安定の度を加へた。千八百三十年七月に歩兵第五十三聯隊の中立が如何に一般から賞讃せられたかを、兵士等は思ひ起してゐた。幾多の大戦役に鍛へられた勇敢なる二人の男、ロボー元帥とプジョー將軍とは、プジョーはロボーの下に屬して指揮を取つてゐた。多勢の斥候隊は、歩兵を

以て編成され、國民兵の各隊のうち潜み、正服をつけた一人の警部を先に立て、暴徒の手に歸した街路を偵察に行つた。暴徒の方では、四辻の角に騎哨を置き、また防寨の外に大膽にも斥候を出した。かくて互に兩方から觀測し合つてゐた。政府は手に軍隊を提げながら躊躇してゐた。夜は將に來らんとして、サン・メーリーの警鐘の音が聞え出した。嘗てはオーステルリッツの戦に臨んだ今の陸軍大臣ソール元帥は、それらの光景を陰鬱な様子で眺めてゐた。

正規の用兵に熟達し、戦の羅針盤たる戦術をのみ手段とし指導としてゐる、それらの老水夫は、民衆の憤怒と稱する廣大なる白波に面しては、全く當惑に陥るの外はない。革命の風は如何ともし難いものである。

市外の國民兵は、列を亂して遽しく馳けつけて來た。輕騎兵第十二大隊の一隊は、サン・ドゥニから馬を馳けさして來た。歩兵第十四聯隊は、クールブヴァアから到着した。士官學校の砲兵隊は、カルーセル廣場に陣取つた。大砲はヴァンセンヌからやつて來た。テイルリー宮殿は靜まり返つてゐた。ルイ・フィリップは平然と構へてゐた。

## 五 バリーの特性

前に述べた通り、既に二年の間にバリーは一つならずの反亂を見てゐた。然し騒擾中のバリーの姿ほど、暴徒の手に歸した町々を除いては、妙に平靜なものは普通餘り見られない。バリーは何事にもすぐに馴れてしまふ。「僅か一つの暴動ではないか。」そしてバリーはそれ位のことには頭を煩はすには餘りに多くの仕事を持つてゐる。實にこの巨大な都市のみが斯かる光景を呈し得るのである。この廣大なる圍廓のみが、内亂と或る妙な靜穩さとを同時に含み得るのである。通常、反亂が初まる時、太鼓の音、集合の譜、非常召集の譜、などが聞える時、商人はたゞかう云ふのみである。

「サン・マルタン街に何か騒ぎがあるらしい。」  
或は云ふ。

「サン・タントアーヌ廓外かな。」

そして屢々平氣で云ひ添へる。

「何でもそつちの方だ。」

やがて、一齊射撃や分隊の銃火などの鋭い凄い響きが近づいてくると、商人は云ふ。

「では本物かな？ いやこれは本物だ！」

それから間もなく、暴徒が迫つて來て街路を占領すると、彼は急いで店を閉ぢ、すぐに正

服を引つかける、即ち商品を安全な場所に隠し身の危険を顧みない。

四辻や通路や袋町で銃火が交はされる。防塞は幾度も奪はれ奪ひ返される。血は流れ、霰弾は人家の正面に蜂の巢のやうに穴をあけ、銃弾は寢所の人々を殺し、死體は往來を塞ぐ。而も其處から少し先の街路には珈琲店の中に球突の音が聞えてゐる。

野次馬等は、戦ひ最中の街路から數歩先の所で、語り合ひ笑ひ合つてゐる。劇場は扉を開いて狂言をやつてゐる。辻馬車は通り、通行人は町に料理を食ひに行く。時とする戦ひがあつてゐる同じ町でさうである。千八百三十一年には、結婚の列を通すために銃戦が一時止められたこともある。

千八百三十九年五月十二日の反亂の時には、サン・マルタン街で、老耄した一人の小さな爺さんが、手車に三色の布を被せ、何かの飲料がはいつてゐる壘を下に積み、それを引いて防塞と軍隊との間を往復し、ココ酒の杯を、或は政府に或は無政府に平氣で提供した。

凡そこれほど不思議な有様は世にあるまい。そして其處にこそ、他の如何なる都會にも見出されないパリーの暴動の個性があるのである。而もそれには二つのことが必要なのである。パリーの偉大さとパリーの快活さと。實にナポレオンの町でありまたヴォルテールの町でなければならぬのである。

けれどもこの度は、千八百三十二年六月五日の戦ひには、この大都市も恐らく自分の力に餘る何かを感じたのであつた。パリーは恐怖を懐いた。至る所に、最も遠い最も「利害關係のない」町々にも、明るいうちから閉された門や窓や雨戸が見られた。勇氣ある者等は武装し、臆病なる者等は身を潜めた。用のある無頓着な行人の姿も見えなかつた。多くの街路は午前の四時頃のやうに人影もなかつた。憂慮すべき事柄が云ひ觸らされ、心痛すべき消息が廣められた。「彼等はフランス銀行を占領してゐる。——サン・メーリー修道院だけでも六百の人数が居て、會堂の中に立て籠り銃眼をあけてゐる。——歩兵等には安心が出来ない。——アルマン・カレル（譯者曰、有名な新聞記者）はクローゼル元帥を訪問した。『先づ第一に、一聯隊集めるが、いゝ』と元帥は云つた。——ラファイエットは病氣である。然し彼はなほ彼等に云つた。『予は汝等のものである。一個の椅子を据ゑる餘地さへあれば、何處にても汝等の後に従ふであらう。』——各自に身を護らなければいけない。夜になつたら、パリーの寂しい隅々にある離れ家を掠奪する者が出て来るに違ひない。（これはどう見ても警察が考へ出したことである。アンヌ・ラッドクリフ（譯者曰、イギリスの奇怪な物語り作者）と政府とが一緒になつたものである。）——オーブリー・ル・ブーシニ街には砲座が設けられてゐる。——ロボーとブ・ジ、一とは相談をした。眞夜中に、或は遅くとも夜明けに、四つの縦隊が同時に暴動の中心を

衝くだらう、一つはバステューニから來、一つはサン・マルタン市門から來、一つはグレーツから來、一つは市場から來るだらう。——また多分軍隊はパリーから撤退し、シャン・ドゥ・マルスに退却するだらう。——何が起るか分らない。然し確かに此度のことは重大である。」人々は特にソール元帥の躊躇してゐることを頭に置いてゐた。「なぜ彼はすぐに攻撃を初めないのか？」彼が深く考へ込んでゐたことは確かである。老獅子はこの影の中に、未知の怪物を嗅ぎつけやうとしてゐるらしかつた。

夜になつた。劇場は開かれなかつた。斥候は苛ら立つた様子で巡回してゐた。通行人等は調べられた。怪しい者等は捕縛せられた。九時までに捕へられた者が、八百人以上に上つた。警視廳は一杯になり、コンシエルジュリー監獄とフォルス監獄も一杯になつた。特にコンシエルジュリー監獄では、パリー——街と呼ばれてゐる長い地下室に藁束が撒き散らされ、その上に囚人等はずみ重ねられたが、リヨン生れのラグランジュといふ男は、彼等に向つて元氣な言葉を饒舌りちらしてゐた。それらの藁は、その男に動かされて、驟雨のやうな音を立ててゐた。他の所では、囚人等は露天の中庭に重り合つて寝てゐた。至る所に不安があり、パリーでは餘り知られない或る戦慄があつた。

人々は家の中に閉ぢ籠つてゐた。妻や母親等は心痛してゐた。聞ゆるのはかういふ聲だけ

であつた。「あゝ、神様、彼は歸つて來ないが！」たゞ時々遠くに馬車の音がするきりだつた。戸口の所で耳を澄すと、喧騒、叫聲、騷擾、聞き分け難い鈍い物音、などが聞え、人々は云つた、「あれは騎兵だ、」或は、「あれは彈藥車が走つて行くのだ。」また、喇叭の音、太鼓の音、小銃の音、そして特にサン・メーリーの痛ましい警鐘の響きが聞えた。人々は大砲の音がするのを今か／＼と待つてゐた。武装した男等が各街路の端に突然現はれて來、「家にはいれ！」と叫びながら何處へか行つてしまつた。人々は急いで戸を閉め切つた。彼等は云つた、「おしまひにはどうなるだらう？」刻一刻に、夜が暗くなるに従つて、暴動の恐ろしい焰のためパリーは益々物凄しい色に染められてゆくがやうであつた。

## 第十一編 原子と暴風

### 一 ガヴローシユの詩の起原

造兵廠の前で人民と軍隊との衝突から突發した反亂が、その前進を止めて退却し、棺車の後に従ひ各大通りにうち續いて云はゞ行列の先頭にのしかゝつてゐた群集のうちに、雪崩れ込んで來た瞬間こそ、實に恐るべき于潮の光景を現出した。群衆は亂れ立ち、列は中斷し、人々は走り出で散亂した。或者は攻撃の喊聲をあげ、或者は色を失つて逃げ出した。大通りを蔽うてゐた大河は、瞬くまに二つにわれ、右と左とに溢れ出し、一時に兩方の無數の横通りの中に、水門が開けられたかのやうに奔流して擴がつていつた。その時メニルモンタン街の方からやつて來る一人の少年があつた。身には襤褸をまとひ、ベルヴィルの丘で折り取つたラバーノンの花の一枝を手にしてゐたが、或る古物商の店先に騎馬用の古いピストルが一つあるのに眼を止めた。彼は鋪石の上に花の枝を投げすてゝ、そして叫んだ。「おい小母さん、道具を借りるよ。」そして彼はピストルを持つて行つてしまつた。

それから間もなく、アムロー街やバス街から逃げ出してゐる狼狽した市民の一群は、ピストルを振り廻してゐる少年に出逢つた。彼は唄を歌つてゐた。

夜分は見えず、

晝間は見える。

偽證文で、

市民は狼狽。

徳を行へ、

とんがり帽子。

それは戦に赴いてる少年ガヴローシユであつた。

大通りで彼は、ピストルに撃鐵がついてゐないことを氣附いた。

彼が歩調を取るのに用ゐてゐる右の一聯の唄や、また時に應じて彼がよく歌ふ種々な唄は、一體誰が作つたのであるか？ 吾人はそれを知らない。恐らく彼が自身で作つたのかも知れない。元來ガヴローシユはあらゆる流行唄に通じてゐて、それに自分の調子をも挿んで

ゐた。妖怪にしてまた悪童である彼は、自然の聲とパリーの聲とで一の雜曲を作つてゐた。小鳥の調子と工場の調子とを一つに緬なひ合してゐた。自分の仲間と相接した地位にある畫工共のことをよく知つてゐた。また三ヶ月ばかり印刷所に奉公してゐたこともあるらしい。或る時、四十人の一人(アカデミー會員の一人)たるパウール・ロルミヤン氏の所へ使ひに行つたこともある。ガヴローシシは文字を知つてゐる浮浪少年であつた。

ガヴローシシは、かの二人の子供を象の中に泊めてやつたあの雨の降るひどい晩に、自分の實際の弟共のために天の役目をしてやつたのだといふことは、夢にも知らなかつた。晩は弟共を助け朝は父を助けたのが、彼のその一夜だつた。夜明けに彼はバレー街を去り、急いで象の所に歸つて來、巧みに二人の子供を引き出し、どうかして手に入れた朝食を三人で食べ、それから、殆んど自分を育ててくれた親切な母である往來に二人を託して、立ち去つてしまつた。別れる時彼は、その場所で晩にまた逢つてやると二人に約束し、別れの言葉の代りに次のやうなことを云ひ残した。「俺は、ステッキを折る、云ひかへれば尻を向ける、またいい言葉で云へば立ち去るぜ。お前達はな、親父おやぢにも母親おははにも逢はなかつたら、晩にまた此處に戻つて來い。晩飯を食はしてやり寝かしてやるからな。」所が二人の子供は、逡巡に拾はれて養育院にやられたか、或は見世物師に盗まれたか、或は單にパリーの廣い渦の中に巻き込

まれてしまつたかして、其處に戻つて來なかつた。現在の社會のどん底には、こんな風に行方の分らなくなつた者が澤山ある。ガヴローシシは再び彼等を見なかつた。あの晩から十週餘り過ぎ去つた。一度ならず彼は頭を搔いてかう云つた。「あの二人の小僧は何處に居るのかな。」

所で、彼はピストルを手にしてボン・トリートリー街までやつて行つた。見るとその街路にはもう店は一軒きり開いてゐなかつたが、面白いことにはそれが菓子屋であつた。全く未知の世界にはいり込む前になほ林檎菓子が一つ食へる、天の興へた機會であつた。ガヴローシシは立ち止り、上衣を撫で廻し、内隠しの中を探り、ポケットを裏返したが、金は一錢もなかつた。彼は叫び出した、「助けてくれー！」

最後の菓子を一つ食ひそこなふのは、實につらいことである。それでもガヴローシシはなほ續けて進んでいつた。

間もなく彼はサン・ルイ街までやつた來た。バルク・ロアイヤル街を横ぎつてゐると、林檎菓子を食へなかつたことが忌々しくてたまらなくなり、眞晝間芝居の廣告を思ふ存分引き裂いて腹癒せをした。

それから少し先で、財産を持つてゐるらしい立派な一群の人々が通るのを見て、彼は肩を聳

かし、感想めいた苦々しい言葉を吐き出すやうにして云つた。  
 「あの金持ちの奴等、妙に肥つてるな！ 口一杯ほうばつて、御馳走の中ころがつてやがる。一體その金をどうするのか聞いてえもんだ。自分でも知らねえつて、なあに金を食ひ物にしてるんだ。腹の中に金をはき出してゐやがるんだ。」

## 二 行進中のガヴロージ

往來の真中で手に撃鐵の無いピストルを持つて振り廻すことが、何か公の務めでともあるかのやうに、ガヴロージは一步毎に元氣になつてきた。マルセイエーズを切れくゝに歌ひながら、その間々に叫んでゐた。

「うめえぞ。俺はリーマチにやられて左の足が悪い。だが皆の衆、俺は愉快だ。市民等は用心するがいゝ、奴等を引つくり返す唄を俺が吐きかけてやらあ。刑事が何だい、犬だらう。おい、犬共に一つ敬意を表してやらうぢやねえか。俺はピストルに奴等を一匹ほしいんだがな(譯者曰、佛語にては、犬といふ語とピストルの撃鐵といふ語とは共に同じolienである)。俺は大通りから来たんだが、皆の衆、もう熱くなつてるぜ、水玉が飛んでるぜ、煮えてるぜ。鍋の泡をしやくつていゝ時分だ。みな進め！ 穢ねえ血で溝を一杯にしる。俺は國のために身

を捧げてるんだ。もう妾きんなんかには逢はねえ、ねえ……なに……さうだ、逢はねえ。だが構はねえ、さあ面白いぞ。みな戦はうぢやねえか、もう壓制は澤山だ！」

その時、横を通つてゐる國民兵の或る鎗騎兵の馬が倒れたので、ガヴロージはピストルを下に置き、その男を起してやり、また彼に手傳つて馬を起してやつた。それから彼はまたピストルを拾ひ上げ、進行を續けた。

トリニー街まで來ると、凡てが静かでひっそりとしてゐた。マレー邸に固有なその平然さは、周囲の廣い喧騒の中にあつて際立つてゐた。四人の上さん達が、或る家の戸口で話し合つてゐた。スコットランドには三人の魔女が居るが(譯者曰、セークスピヤの劇曲マクベス中に出て來て、マクベスが未來國王となることを豫言した女)、パリーには四人組の上さんが居る。「汝は王たるべし」といふ言葉は、アルムイールの荒野でマクベスに語られたやうに、ポードアイエの四辻で氣味悪くポナバルトに投げつけられたかも知れない。

然しトリニー街の上さん達は、自分等の方のことしか頭に置いてゐなかつた。それは三人の門番の女と、籠を負ひ鉤杖を持つた屑拾ひの女とであつた。

彼女等は四人共老年の四隅に立つてゐるがやうであつた。老年の四隅とは、老耄と死に際と零落と悲哀とである。



屑屋は肩を狭めてゐた。この野天の仲間のうちでは、屑屋は頭を下げ門番は上に立つてゐる。それは門番の手中にある掃溜から来る関係であつて、其處にいゝ物が多いか少いかは全く塵芥を掃き寄せる者の手加減によるのである。箒の使ひ方にも親切さがあるものである。この屑拾ひの女は、恩を蒙つてゐるものと見えて、三人の門番の女に、どんな笑顔か知らないが兎に角笑顔を作つてゐた。彼女等は次のやうなことを話してゐた。

「時に、お前さん所の猫はいつも氣むづかしいかい？」

「えーえ、猫はどうせ犬の敵かたみなものね。苦情を云ふのは犬の方だよ。」

「それから私共こちどももさ。」

「だがね、猫の蚤は人間にはたからないつていふぢやないか。」

「それはさうさ、でも犬は危いよ。何でも餘り犬が多くなつて新聞に書き立てられた年があつたよ。テイルリーの御殿に大きな羊がゐてローマ王(ナポレオン二世)の小さな馬車を引いてた時のことだよ。お前さんはローマ王を覚えてるかい。」

「私はボルドー公が好きだつたよ。」

「私はルイ十七世を知つてゐた。ルイ十七世の方がいゝね。」

「肉がほんとに高いぢやないか、バタゴンさん。」

「あゝ、もうそんなことは云ひつこなし、私は肉屋が大嫌ひ。身震ひが出るよ。この節ぢや骨附の所しか買へやしないからね。」

その時屑拾ひの女が口を出した。

「みなさん、商賣の方も不景氣ですよ。芥溜だつてお話しになりません。今ぢや物を捨てる人なんか一人もありません。何でも食べてしまふですよ。」

「でもヴァルグレームさん、お前さんよりもつと貧乏な人だつてあるよ。」

「さう云へばまあさうですね。」と屑屋は逆らひもせず答へた。「私にはこれでもきまつた仕事がありますからね。」

一寸話がとぎれた。屑拾ひの女は、誰の心にもあるやうに少し吹聴したくなつて、云ひ添へた。

「朝家に歸つて、私は負籠の物を調べ、一々選り分けるのですよ。室一杯になります。襪襦屑は箒に入れ、果物の種は小桶に入れ、襯衣は戸棚に入れ、毛布は箆筒に入れ、紙屑は窓の隅に置き、食べられる物は鉢に入れ、硝子の片かたは煖爐の中に入れ、破れ靴は扉の後ろに置き、骨は寢臺の下に置くのですよ。」

ガヴローシシは彼女等の後ろに立ち止つて、耳を傾けてゐた。

「婆さん達、」と彼は云つた。「お前達が政治の話をしたつて何になるんだい？」  
すると彼は、四人から口を揃へて攻撃された。

「また浮浪漢が来た！」

「何の切れ端を持つてるんだい？ おやピストル！」

「何だつて、乞食の餓鬼が！」

「いつでも政府を倒さうとばかりしてやがる。」

ガヴロッシュは輕蔑しきつたやうな風で、その仕返しとしてはたゞ、手を大きく開きながら拇指の先で鼻の頭を押し上げてみせた。

屑拾ひの女は叫んだ。

「靴なしの悪者！」

前にパタゴンさんと云はれて答へた女は、嫌らしく両手をばたりと叩いた。

「これは何か悪いことが起るんだよ、屹度。向ふの髯を生やしてる悪い奴がね、赤い帽子を被つた若い者と腕を取り合つて通るのを、私は毎朝見たんだよ。今日通る所を見ると、腕に銃砲を抱へてゐたよ。バシューさんの話では、この前の週に騒動があつたとさ、あの……何とか云つた……さう、ポントアーズにさ。それにこの嫌な小僧までがピストルを持つてる

ぢやないか。セレストンには一杯大砲が置いてあるらしいよ。世の中を騒がすことばかり考へてるこんな奴共にかゝつちや、政府もやりきれたもんぢやないね。やつと落ち附いて来たのにさ、あんなにひどいことがあつた後でね。おう私は、あの可哀相な女王が馬車に乗つて通られる所を見たよ！ それに騒ぎがあればまた煙草が高くなる。憎んでも足りないことだ。屹度こんな悪い奴は首でも切られるがおちだよ。」

「鼻がずー／＼云つてるぜ、婆さん、」とガヴロッシュは云つた。「鼻をかむがいゝや。」  
そして彼は向ふに歩き出した。

バヴェー街まで行つた時、屑拾ひの女のことを彼の頭に浮んだ。彼は獨語した。  
「革命家を悪口しちやいけねえぜ、芥溜婆さん。このピストルもお前のためものだ。お前の負籠にもつと食へるやうなものを入れてやるためのものだ。」

突然彼は後ろに聲がするのを聞いた。それはパタゴン婆さんで、彼を追つかけて來、速くから拳をつき出して見せながら、叫んでゐるのであつた。

「お前はたかゞ父無し兒ぢやないか！」

「そんなことか、」とガヴロッシュは云つた。「俺は毛ほどにも思つてやしねえ。」

それから少しして、彼はラモアンニオン旅館の前を通つた。其處で彼は呼聲を上げた。

「戦に出かける！」

そして彼は突然憂鬱に襲はれた。宛も向ふの心を動かさうとしてるかのやうな非難の様子で、ピストルをちつと眺めた。

「俺は戦に發つんだが、お前は發しないんだな。」と彼はピストルに云つた。

一匹の犬は他の犬(即ち撃鐵)から氣を散らさせることもある。ごく瘦せた一匹の老犬が通りかゝつた。ガヴローシユはそれを可哀相に思つた。

「可哀相な奴だ。」と彼は云つた。「お前は樽でも呑み込んだのか、胴體に穢が見えてるぜ。」それから彼は、オルム・サン・ゼルヴェーの方へ進んでいつた。

### 三 理髮師の至當なる憤り

ガヴローシユが象の親切な腹の中に迎へ入れてやつた二人の子供を、前に逐つ拂つたあの嚴めしい理髮師は、その時店の中に居て、帝國の下に働いた勳章所有の老兵士に、髯を剃つてやつてゐた。二人は話をしてゐた。理髮師は當然先づ暴動のことを老兵士に話し、次にラマルク將軍のことを話し、そしてラマルクから皇帝のことに話が向いて來た。それは實に理髮師と兵士との面白い會話であつて、もしブリードナム(譯者曰、壯言大言する架空の人物であつ

て、彼に至る所て出逢つたことを自ら誌したといふ記録を一作者が作つてゐる。)が居合したならば、その話を唐草模様式の言葉で飾り立て、「剃刀と劔との對話」とでも題したのであらう。

「旦那、」と理髮師は云つた。「皇帝は馬術はどうでした？」

「下手だつたね。落ち方を知らなかつた。だから決して落ちたことがなかつたよ。」

「立派な馬を持つてゐましたか。立派なのがあつた筈ですね。」

「わしは勳章を貰つた時に、そいつを見たがね、足の早い白の牝馬だつたよ。耳が開いて居り、鞍壺が深く、綺麗な頭には黒い星が一つあつて、頸が長く、足も高く上がり、胸が張つてゐて、肩には圓みがあり、尻もしつかりしてゐた。高さは十五手幅の上もあつたかな。」

「いゝ馬ですな。」と理髮師は云つた。

「なにしろ陛下の馬だからね。」

理髮師は、それだけ話した後では一寸口を噤んだ方がいゝと思つて、さうしたが、それからまた云ひ出した。

「皇帝はたゞ一度傷を受けたゞけだといふぢやありませんか、旦那。」

老兵士は、如何にもよく知つてるといふやうに落ち附いた嚴かな調子で答へた。

「踵をね。ラチスボンでだつた。わしはその日位皇帝が立派な服装なびをしてるのは見たこと

がなかつた。作り立ての貨幣みたいに綺麗だつた。」

「そして旦那は、定めし幾度も傷を負はれたでせうな。」

「わしか、」と兵士は云つた。「なに大したこともないがね。マレンゴーでは頸に二箇所サールの傷を受け、オーステルリッツでは右の腕に弾を受け、イエナでは左の腰にやはり弾を受け、フリートラントでは銃剣の傷を受け、其處で……モスコワでは全身に七八箇所の鎗傷を受け、ルーツェンでは榴弾の破片で指を一本挫いた。……あゝそれからワールローでは、腿にピスカイヤン銃の弾を一つ受けた。まあそれだけだ。」

「いゝですな、戦争で死ぬのは！」と理髪師は勇ましい調子で叫んだ。「病氣になつて、薬だの膏藥だの注射だの醫者だのといつて、寢床の上でちびり／＼と毎日少しづつ死んでゆくよりか、全くの所、大砲の弾ですどんと一發腹に穴を明けられる方が、いくらいゝか分りませんな。」

「君は中々元氣だね。」と兵士は云つた。

その言葉の終るか終らないうちに、恐ろしい物音が店を揺り動かした。表の窓硝子が一枚突然碎け散つたのである。

理髪師は顔色を變へた。

「大變だ！」と彼は叫んだ、「やつて來た。」

「何だ？」

「大砲の彈です。」

「そらこれだ。」と兵士は云つた。

そして彼は何か床に轉つてた物を拾ひ上げた。それは一つの石だつた。

理髪師は壞れた窓の所へ走り寄つた。すると、サン・ジャン市場の方へ足に任して逃げてゆくガヴロシユの姿が見えた。ガヴロシユは、この理髪師の店の前を通りかゝると、二人の子供のことが心にあつたので、何とか挨拶をしてやりたくて堪らなくなり、遂にその窓に石を投げつけたのであつた。

「あの野郎！」と理髪師は色を失つてゐたのが此度は青くなつて怒鳴つた。「面白半分いふに惡戯つをしやがる。あの浮浪少年に一體誰が何をしたつて云ふんだ？」

#### 四 少年老人に驚く

そのうちにガヴロシユは、既に武装が解かれた營所の残つてゐるサン・ジャン市場で、ア  
ンジョーラとクルルフェーラックとコンプフェールとフリーイーとに導かれた一隊と聯絡を保つ

た。彼等は殆んど皆武器を持つてゐた。バオレルとジャンブルーヴェールも彼等に出逢つて、一群は益々大きくなつてゐた。アンジョーラは、二重銃身の獵銃を持つてゐた。コンプフェールは、隊の番號のはいつた國民兵の銃を手にし、卸を外した上衣から見えてる二挺のピストルを帯革にさしてゐた。ジャンブルーヴェールは、騎兵川の古い短銃を持つてゐた。バオレルはカラビン銃を持つてゐた。クールフェーラックは仕込杖を抜いて振り廻してゐた。フーイはサーベルを抜いて、先頭に立ちながら叫んでゐた、「ポーランド萬歳！」

彼等は、襟飾りもなく、帽子も被らず、息を切らし、雨に濡れ、眼を光らして、モルラン河岸からやつて來た。ガヴロッシュは平氣で彼等に加はつた。

「何處へ行くかな？」

「一緒に來い。」とクールフェーラックは云つた。

フーイの後にはバオレルが進んでゐた、といふより寧ろ、暴動の水の中を泳ぐ魚のやうに躍り上つてゐた。彼は緋の胴衣チヨッキを着て、凡てを破り碎くやうな言葉を發してゐた。その胴衣に一人の通行人は驚いて、狼狽しながら叫んだ。

「やあ赤黨！」

「赤だ、赤黨だ！」とバオレルは答へ返した。「恐がるとは可笑しな市民だな。俺は赤い美

人草なんかの前に震へ上りはしない。小さな赤帽子なんか少しも恐くはない。おい、俺を信じろ、赤の恐怖なんか角のある獸にでもやつてしまへ。」

彼は壁の片隅に、世に最も平和なる一枚の紙が貼つてあるのに眼を止めた。それは、鵝卵を食べていゝといふ許可書であり、パリーの大僧正から「羊の群」に對して發せられた四句節の教書であつた。

バオレルは叫んだ。

「羊の群といふのは鷺鳥の群といふのを丁寧に云つた言葉だ。」（譯者曰、羊の群は信徒の意になり鷺鳥の群は愚人の意にもなる、そして佛語では、ouailles; oies と兩者の字が似てゐる。）

そして彼は壁からその教書をはぎ取つた。そのことはガヴロッシュを感心させた。ガヴロッシュはその時からバオレルを學びはじめた。

「バオレル」とアンジョーラは云つた、「それはよくない。その教書はそのままにしとく方がいゝんだ、僕等はそんなものに用はないんだ。君は憤慨を無駄に費してる。彈藥は大事に取つておかなかちやいけない。魂の彈も、銃の彈も、戦列以外では費さないことだ。」

「誰にでも自分のやり方といふがあるさ、アンジョーラ。」とバオレルは返答した。「僧正のこの文句は僕の氣に入らない。僕は鵝卵を食ふのを人から許して貰ひたくない。君は冷かに燃

えてるが、僕は愉快になつてる。それに僕は何も無駄をしてるのではない。元氣をつけてるだけだ。この教書を引き裂くのも、ヘルクル(畜生)、先づ食慾をつけるためだ。」

このヘルクルといふ語(譯者曰、Herold 即ちヘルキール神の名の一種の綴り)はガヴローシュの注意を惹いた。彼はあらゆる機會に物を知らうとしてゐたし、またこの揭示破棄者に尊敬の念を懷いてゐた。彼は尋ねた。

「ヘルクルつて何のことですか。」

パオレルは答へた。

「それはラテン語の神聖な犬の名前だ。」(譯者曰、犬といふは茲ては誓の言葉。)

その時パオレルは、黒い髯のある色の蒼い一人の青年が彼等の通るのを眺めてるのを、或る家の窓に認めた。恐らく ABO の友の仲間であつたらう。彼はそれに叫んだ。

「早く、彈藥だ！ パラペロム(ラテン語——戦の用意をしる)。」

「ペロンム(好男子)！ なるほどさうだ。」とガヴローシュは云つた。彼は今ではラテン語を了解してゐたわけである。

騒がしい一隊が彼等の後に随つてゐた。學生、美術家、エースのクイーグールド派に加盟してゐる青年、労働者、船頭などで、棒や銃劍を持つて居り、或る者はコンプフェールのやうに

ズボンの中にピストルをつゝ込んでゐた。ごく高齡らしい老人が一人この群にはいつて歩いてゐた。武器は持つてゐなかつた、そして何か考へ込んだやうな様子をしてゐたが、後れまいとして足を早めてゐた。ガヴローシュはそれに氣附いた。

「あれは何でせう？」と彼はクールフェーラックに云つた。

「爺さんさ。」

それはマブーフ氏であつた。

## 五 老 人

これまでに起つたことを一寸述べて置きたい。

アンジューラとその仲間、龍騎兵が襲撃を初めた時に、ブールドン大通りの倉庫の近くに来てゐた。アンジューラとクールフェーラックとコンプフェールとは、「防寨へー」と叫んでパソビエール街の方から進んだ人々のうちにはいつた。レディギエール街で彼等は、街路を辿つてゐる一人の老人に出逢つた。

彼等の注意を惹いたのは、この老人が酔つ拂つてゐるやうに、千鳥足で歩いてゐることだつた。その上老人は、その朝中雨が降りその時もなほ可なり降つてゐたのに、帽子をぬい

で手に持つてゐた。クールフーブラックは、それがマブーフ老人であることを見て取つた。何度もマリユスについて戸口の所まで来たことがあるので、彼は見覚えてるのであつた。そしてこの古本の好きな老教會理事の平素が、如何にも平和で臆病以上とも云へるほどであることを知つてゐたので、今この騷擾の最中に、騎兵の襲撃からいくらかも距てない所で、殆んど銃火の中で、雨の降るのに帽子も被らず、銃弾の間をうろついているその姿を見て、彼は非常に驚き、その側に寄つていつた。そしてこの二十五歳の暴徒と八十歳を越えた老人との間に、次の對話が交はされた。

「マブーフさん、家へお歸りなさい。」

「なぜ？」

「騒ぎが起りかゝつてゐます。」

「それは結構だ。」

「サーベルを振り廻したり、鐵砲を打つたりするんですよ、マブーフさん。」

「結構だね。」

「大砲も打つんですよ。」

「結構だ。一體お前さん達は何處へ行くのかな。」

「政府を打ち倒しに行くんです。」

「それは結構だ。」

そして老人は彼等の後についていつた。それ以後、彼はもう一言も口も利かなかつた。彼の足取りは俄にしつかりとなつた。労働者等が腕を貸さうとしたが、彼は頭を振つて拒んだ。そして殆んど縦列の最先に進んで、行進してるやうな身振りといつてるやうな顔附とを同時に示してゐた。

「何といふ激しい爺さんだらう！」と學生等は囁いた。昔の國約議會議員の一人だ、昔國王を殺した者の一人だ、といふ噂が群集の中に傳はつた。

斯くて一群の者等はヴェールリー街から進んだ。少年ガヴロッシュは、先頭に立つて大聲に唄を歌ひながら、一種の喇叭となつてゐた。彼は歌つた。

向ふをこらん月は出る、

いつ私等は森に行く！

シャルロットにシャルロは尋ねぬ。

シャトーには

ト、ト、ト、ト、ト、

私が持つは、一人の神様、一人の王様、一文錢に片々靴。

じやかう草やら露の玉

朝早くから飲んだので、

二匹の雀は満腹りん。

パッシーには

ジー、ジー、ジー。

私が持つは、一人の神様、一人の王様、一文錢に片々靴。

てうまのやうな二匹の狼

可哀さうにも酔つ拂ひ、

穴の中では虎が御機嫌。

ムードンには

ドン、ドン、ドン。

私が持つは、一人の神様、一人の王様、一文錢に片々靴。

一人は悪體、一人は雑言。

いつ私等は森に行く？

シャルロットにシャルロは尋ねぬ。

パンタンには

タン、タン、タン。

私が持つは、一人の神様、一人の王様、一文錢に片々靴。

彼等はサン・メーリーの方へ進んでいった。



六新 兵

一隊の群は刻一刻に大きくなつていつた。ピエット街のあたりで、半白の髪をした背の高い男が彼等に加はつた。クールフェーラックとアンジローラとコンプフェールとは、そのきつい勇敢な顔附を認めたが、誰も彼に見覚えはなかつた。ガヴロッシュは、唄を歌ひ、口笛を鳴らし、饒舌り散らし、先頭に立ち、撃鐵の取れたピストルの柄で店々の雨戸を叩いてゐて、この男には注意を向けなかつた。

ヴニールリー街で彼等はたま／＼クールフェーラックの家の前を通りかゝつた。

「丁度いゝ」とクールフェーラックは云つた。「僕は金入れを忘れてるし、帽子を失くしてゐる。」彼は群を離れて、大急ぎで自分の室に上つていつた。そして古帽子と金入れを取り、また汚れた襯衣の中に隠しておいた大鞆ほどの可なり大きい四角な箱を取り上げた。走りながら下りて来ると、門番の女が彼を呼びかけた。

「ドゥックールフェーラックさん！」

「お前の名は何といふんだ？」とクールフェーラックは答へ返した。  
門番の女は呆おっけにとられた。

「御存じぢやありませんか。門番ですよ、ヴーヴァンですよ。」

「よろしい、お前が僕のことをまだドゥックールフェーラックさんといふなら、僕はお前をドゥーヴァンお上さんと呼んでやる（譯者曰、ドゥは貴族の名前に多くついている分詞である）。所で、何か用か、何だ？」

「あなたに逢ひたいといふ人が来てゐます。」

「誰だ？」

「知りません。」

「何處に居る？」

「私の室です。」

「面倒だ！」とクールフェーラックは云つた。

「でも一時間の上もあなたの歸りを待つてゐるんですよ。」と門番の女は云つた。

それと同時に、一人の若い者が門番小屋から出て來た。労働者らしい様子をし、瘦せて、色蒼く、小柄で、顔には雀斑そばかすがあり、何處からか拾つてきたやうな上衣を着、横に天鵞絨のついた補綴つぎだらけのズボンをはき、男といふよりも寧ろ男に變装してゐる女のやうな風であつた。然しその聲はどう見ても女とは思へなかつた。彼はクールフェーラックに云つた。

「すみませんが、マリユスさんは？」

「こゝには居ない。」

「今晚歸つて來るでせうか。」

「どうだか分らない。」

そしてクールフェーラックは云ひ添へた、「僕は少くとも歸らなう。」

若い男は彼の顔をちつと見つめ、そして尋ねた。

「なぜですか。」

「歸らないから歸らないんだ。」

「では何處へ行くんですか。」

「それが君に何の用があるんだ？」

「その箱を私に持たしてくれませんか。」

「僕は防寨に行くんだぜ。」

「私もあなたと一緒に歸つて宜しいですか。」

「行きたければ行つていゝさ。」とクールフェーラックは答へた。「往來は人の自由だ、鋪石は萬人のものだ。」

そして彼は、仲間を追つつくために走つて逃げ出した。仲間と一緒にになると、その一人に箱を持たした。それから十五六分たつた後、かの若い男が實際ついてくるのに彼は氣附いた。

群衆は、一定の欲する通りの方へばかり行くものではない。前に説明した通り、風のまにまに吹きやられるものである。彼等はサン・メーリーを通り越し、何といふ譯もなくたゞ漠然とサン・ドゥニ街まで來てしまつた。

大正八年六月二十日印刷  
大正八年六月廿五日發行

(定價金壹圓六拾錢)

全 四 冊

◀ ルプラゼミ・レ ▶

翻譯者

豐島與志雄

發行者

佐藤義亮

發行所

新 潮 社

東京市牛込區矢來町三番地

電話番町(八九〇九番)

印刷所

東京市神田區宮本町五番地  
電話下谷、四〇六七番

新潮社印刷部

印刷者 高橋治一

番二四七一(京東)替振

# 一人と藝術叢書

海外諸文豪の日記書簡回想記の類を輯め裏面乃至側面から直に其人と生活とを窮はしむるものである

## 第四編 ■巴里の三十年(新刊)

ドオデエ著  
後藤末雄氏譯

佛蘭西の文豪ドオデエが晩年自ら筆をとりて、如何にして文學に志せしか、如何にして文壇の人となりしか、如何にして其の三十年の文壇生活を送れるかを述べたるもの。これを文豪生ひ立ちの記と見るも可、**文豪立志篇**と見るも亦可也。其文壇への憧憬と初陣、その作家としての悦樂と苦み、その交遊、その日常生活の巨細を、美しく筆に描ける所、文豪の樂々觀として興趣極めて豊か也。

## 第一編 ■トルストイ書簡集

石田三治氏譯

## 第二編 ■トルストイ日記

昇 曙夢氏譯

## 第三編 ■ドストエーフスキイ書簡集

山村暮鳥氏譯

◀送料六錢▶ 一全部六十五錢 ▶上製本◀

森鷗外氏序 生田長江氏譯 (第八版出来)

## ■ニイチェ著 ツアラトウストラ

總洋布最上製  
定價一圓八十錢  
小包料十二錢

是れ晩近歐洲思想界の巨人ニイチェの代表的著作也。彼の奔放なる詩歌や、深刻なる哲學や、悲壯なる宗教や、悉く收めて此の中に在り。以てニイチェの眞面容を知る可く、以て晩近思潮そのもの、精髓を知る可し。譯は生田氏が數年の苦心に成り、精嚴にして莊重、原文の精神風格を傳ふるに於いて遺憾なしと稱せらる。

阿部次郎氏著 最新刊出来

## ■ツアラツストラ解釋

並に批評

大版特製箱入  
定價壹圓貳拾錢  
郵送料八錢

ニイチェの「ツアラツストラ」は極めて難解、誤り讀まるゝこと多し。阿部氏は哲學界の權威、深く此の書を受讀してよく其の幽趣微韻を了す。即ち爲めに深切なる解釋を加へ、創意ある批評を添ふ。氏自ら曰く、余近時一四人の極めて無理解なる本篇の解釋を讀み、此の書を公表するは左迄遠慮すべきに非ざるを覺れりと。

# ■ドストエーフスキイ全集■

トルストイと並んで全人類の運命を負へる大偉人ドストエーフスキイの作品を、直接に露の原文より譯出して此の全集をつくる。各冊何れも堂々たる長大篇のみ也。

(1) カラマゾフの兄弟 米川正夫譯

武者小路氏が、驚く可き本だ、世界にこんな本が又とあるかと云ひたい。無いにきまつてゐる、驚く、驚く。と言ひしもの。作者が畢生の心血を凝らして描ける代表的長大篇也。  
▼全三冊 一冊壹圓參拾錢、送料八錢づゝ

(2) 虐げられし人々 昇曙夢譯

人間數命の運命を描き盡くして、滿眼の熱涙を世の虐げられし人々に注ぐ。殊に、一面戀に破れたる沈痛の經驗をさながら描ける作者の自叙傳として別様の感興深きものあらん。  
▼全一冊 定價壹圓五十錢、送料八錢

(3) 罪と罰 米川正夫譯

襟を正して讀む可き嚴肅無二の作物にして、而も結構の複雑、變化の端睨すべからざる、篇中章を追ひて繼起する事件の悉く驚心駭魄的なる、古今に類を絶せる大探偵小説の觀あり。  
▼全二冊 一冊壹圓三十錢、送料八錢づゝ

(4) 白痴 米川正夫譯

「カラマゾフ」に次ぐ雄篇にして、實に作者が藝術益々爛熟し來るの時に於て、深刻殊に甚しく、様々の人物、人間苦の深淵に轉轍し、様々の心理、等しく靈肉の秘奥を窺はしむ。  
▼全二冊 一冊壹圓七十錢、送料十二錢づゝ

(5) 賭博者 原白光譯

賭博場を背景として、誇り高き處女と魅力なき娼婦との間に置かれたる一青年の苦悶を描き、縦横の奇想の裏に博大的人間愛を潜めたるもの。附録に「貧しき人々」の一篇あり。  
▼全一冊 定價壹圓四拾錢、送料八錢

(6) 惡靈 米川正夫譯

原作者の全精神を最も深刻に最も明白に語れるものは「カラマゾフ」と此の「惡靈」也。神人の理想と人神とを並び説いて、此の天才の幽奥測り難き魂の深淵を啓き示せる大傑作也  
▼全二冊 價壹圓七十錢、送料十二錢づゝ

(7) 永遠の良人 原白光譯

— 近 刊 —  
□ 目下印刷中 □

女性問題解決の關鍵は是れ也

# 母性の復興

エレン・ケイ女史著  
平塚らいてう女史譯  
新刊 定價 金七十錢  
郵送料 金八錢

エレン・ケイ女史は、現代女流思想家の第一人者。本書は、その著作中最も世に聞えたるものにして、母性の復興を論じ、それを可能ならしむる社會的手段に就いて説く。今や、社會問題に就いての論議、驟然たるの時、社會問題の一半を領する女性問題の上に下されたる此の聰明なる見解と穩健なる斷案とに接するは、思ひをこゝに致す人々の緊要事ならざる可からず。譯者は、日本女流思想家の第一人者にして、此の論に強き共鳴を有する人。著者と譯者と相俟つて、本書の光彩更に一層なるものあらん。

## 近刊 復 活

一たび出ても發賣禁止の厄に會ひしもの、今回改めて會にするを得るに至れり。  
最新式八ポイント活字を用ゐ、此の大家を一巻に窮して世に頒つこととなす。

フロオベル著  
中村星湖氏譯

トルストイ著  
中島清氏譯

世界第一の戀愛詩集、始めて口語の新體に譯せらる

## ハイネ詩集

生田春月氏譯  
(第十版) 定價 八拾五錢  
郵送料 六錢

「古今を通じて、世界に亘りて、ハイネに匹敵すべき、甘き情熱の音楽はあらず」とはエイチエの語也、ハイネの名は、青春子女の憧憬措く能はざるもの、其の詩殆ど皆戀のなやみを歌ひて、濃艶蒼蒼の如く、可憐童に似たり。生田春月氏、今、獨の原語に就き之を流麗雅馴なる口語體に譯す。收むるところすべて三百有一篇、ハイネの各方面を盡くして遺憾なく、殆ど其の全詩集と稱するに足るものあり。

## ホイットマン詩集

白鳥省吾氏譯  
(第三版) 定價 八拾五錢  
郵送料 六錢

近代民主詩人の代表者たるホイットマンの全作に亘り、其の精神を譯出さ。白鳥氏は、此の詩人に傾倒すること久しく、大なる憧憬と興味とを以て、反譯の事に従へり。

## ゲエテ詩集

生田春月氏譯  
(第三版) 定價 八拾五錢  
郵送料 六錢

ゲエテは世界的大詩人、その詩悉く「大いなる懺悔録の一節」也。寔に人を動かすこと斯くの如きは稀也。生田氏今慘憺の苦心を重ね努力半歳にして漸く本譯を全うせり。

□ 集 說 小 □

■ 蘇 生	■ 世の中へ	■ 痴人の愛	■ 戀の日	■ 傀儡師	■ 心の王國	■ 血で描いた畫	■ 學生時代
豐島與志雄著	加能作次郎著	久米正雄著	久保田万太郎著	芥川龍之介著	菊池 寛著	小川未明著	久米正雄著
定價壹圓五拾錢 郵送料八錢	定價壹圓五拾錢 郵送料八錢	定價壹圓四拾錢 郵送料八錢	定價九拾五錢 郵送料八錢	定價壹圓四拾錢 郵送料八錢	定價壹圓參拾錢 郵送料八錢	定價壹圓貳拾錢 郵送料八錢	定價壹圓貳拾錢 郵送料八錢

389  
33



終